

公益財団法人 母子健康協会  
第44回シンポジウム

「発達や行動が気になる子供への園での対応」

日時 令和6年1月31日（水） 午後2時～5時45分

座長 埼玉県立小児医療センター 病院長 岡 明

場所 アルカディア市ヶ谷：私学会館（東京都千代田区）  
※WEBにて全国の参加申し込み者にもLIVE配信

講演

1. イントロダクション

…子供の未来を信じて 課題のある幼児への支援…

1ページ

座長 埼玉県立小児医療センター 病院長

岡 明

2. 発達障害支援のコツ

6ページ

講師 横須賀市療育相談センター 所長

広瀬 宏之

3. 発達や行動が気になる子どもと保護者への支援

21ページ

講師 埼玉学園大学人間学部心理学科 教授

佐々木美恵

4. 総合討論

39ページ





# イントロダクション

埼玉県立小児医療センター 病院長  
岡 明

## 「子供の未来を信じて」 課題のある幼児への支援」



皆さん、こんにちは。岡でございます。ご紹介ありがとうございます。そして、この第44回、母子健康協会のシンポジウムにご参加いただき、どうもありがとうございます。

今、ご案内があったシンポジウムに参加された方々からいただくアンケート、とっても大事にしておりますので、ぜひ、最後にご記入ください。

といいますのは、今回、この「気になる子供への対応」ということをテーマにさせていただいたのも、皆様のアンケートの中で、やはりそういう質問が多かった。今回のシンポジウムでこういうことをやっていただきたいというご意見が多かったため、このテーマを取り上げさせていただきました。このテーマを取り上げさせていただきます。

やはり今回も300名以上のご参加という事で、皆様、そういう関心が高いのかなど。日頃からそういった子供たちの支援をしていただいているのかなと思っております。

それで、私からは最初、イントロダクションとして、少し私自身の考えを述べさせていただきます。タイトルに書かせ

ていただいているように、「子供たちの未来を信じて」ということで、皆さんが日頃支援していただいている子供たち、小学校就学前の過程を経て、今度は小学校に入っていくわけです。その小学校に入っていくときに、皆様が頑張っていたことが必ず役に立つ。そういう意味で、子供たちがきつといいほうに発達していただくなということをお願いしていただいて、信じて、ぜひ課題のある幼児さんへの支援、本当に大変だと思うんですけども、頑張ってくださいという意味で、こういうタイトルにさせていただきます。

さて、少し気になる子、皆さんのほうが、もうよく存じだと思えますけれども、例えば、日本保育協会から公開されている調査報告なども拝見しますと、いわゆる気になる子のテーマとして取り上げられているのは、発達上の課題があるお子さんや、落ち着き、情緒面、あるいは運動面、そのほか、やはり少し気になるんだというお子さんだと思います。

9割以上の施設、これは保育所だと思えますけれども、9割以上の施設に、そういう気になるお子さんがいるということで、発達上の課題や、コミュニケーション、落ち着き、情緒面といったことをご心配されているということだと思います。

どんなことが難しいのかということや、集団生活、それから、園外活動、行事といったときが、やはりなかなか大変であるとか、こだわりやパニック、それから

### いわゆる「気になる子」

2016年 日本保育協会の調査報告から

#### いわゆる「気になる子」とは

障害の診断は受けていないが、障害の疑いが感じられる子どもや保育上の支援を要する子ども

#### 気になる子どもの課題

- 発達上の問題/コミュニケーション
- 落ち着き/情緒面
- 運動面/その他

「2016年 日本保育協会 保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受入れ実態、障害児保育等のその支援の内容、居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書」より引用

2

### 保育所のいわゆる「気になる子」

2016年3月 日本保育協会調査報告より

#### 受け入れの実態

9割以上に「気になる子」がいる

#### 気になる内容（頻度順）

- 発達上の問題（発達の遅れなど）
- コミュニケーション（やりとり・視線・集団参加など）
- 落ち着き（多動・落ち着き・集中力など）
- 情緒面（乱暴・こだわり・感情のコントロール）
- 運動面（ぎこちなさ・不器用など）

「2016年 日本保育協会 保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受入れ実態、障害児保育等のその支援の内容、居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書」より引用

3

### 保育所のいわゆる「気になる子」

2016年3月 日本保育協会調査報告より

#### 「大変むずかしい」あるいは「むずかしい」という回答の割合

##### ●保育の現状：

- 集団での保育（82%）
- 園外での保育（69%）
- 行事の企画運営（71%）

##### ●その子自身への対応：

- こだわり・パニックへの対応（78%）
- 生活習慣の確立（69%）
- その子についての理解（73%）

「2016年 日本保育協会 保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受入れ実態、障害児保育等のその支援の内容、居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書」より引用

4

生活習慣の確立にも苦労される。その子についてどう理解したらいいのか、そういったことに苦労されているということも書かれています。

あともう一つ大変なのは、やはり保護者への対応だと思えます。保護者に対して、どういうふうはその子についての共通理解を得るのか、コミュニケーションをとっていくのか、それから、保護者へどういうふうに通文を報告していくのか。そういったことがアンケートの中では課題として書いてあります。

今のは気になる子のお話ですけども、一方、すでに障がいを持っておられる、診断を受けているお子さんについても、今、保育所においているお子さんが大勢いらっしゃると思います。ここでも、ここに書いてあるような発達障がいのお子さんたちが保育園、保育所でお世話になっているということが書かれています。

今日は、そういった気になる子供を中心にしたお子さんたちについて、この後、二人の講師からお話を頂きます。その前に、私から、1つトピックとして、少しお話ししようと思っているのが、5歳児健診ということなんです。

お子さんが減ってしまったので、異次元の少子化に対応しなければいけない、日本としても大変な問題なので頑張ろうということで、国がこども家庭庁もつくって、いろいろ対策を立てていただいています。

その中の1つとして、5歳児健診が、国の施策として取り上げられる方向性が決まっ

### 保育所のいわゆる「気になる子」

2016年3月 日本保育協会調査報告より

- 保護者への対応：
  - 「大変むずかしい」あるいは「むずかしい」という回答の割合
    - その子についての共通理解（78%）
    - コミュニケーションをとること（66%）
    - 保育の実践のための連携（69%）
- 「気になる子」の日常生活や発達状況の保護者への報告
  - こどもの生活や発達状況に変化があった時に報告（59%）
  - 定期的に個別面談（16%）
  - 保護者から求められる都度報告（9%）

「2016年 日本保育協会 保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受入れ実態、障害児保育等のその支援の内容、居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書」より引用

5

### 保育所の障害児

2016年3月 日本保育協会調査報告より

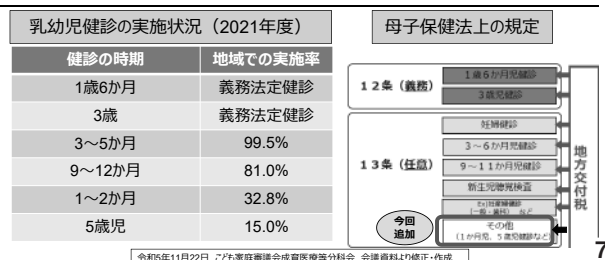
- 各障害種類の割合
    - 自閉症（自閉的傾向） 35%
    - 知的障害 20%
    - ADHD 15%
    - 肢体不自由 8%
- 年齢が上がるほど、自閉症とADHDの割合が上昇

「2016年 日本保育協会 保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受入れ実態、障害児保育等のその支援の内容、居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書」より引用

6

### 今後、5歳児健診の普及へ

- 国によるこども・子育て政策の強化の流れ
- 2018年12月 育児基本法成立
  - 2023年1月 「異次元の少子化対策」
  - 2023年4月 こども家庭庁設置
  - 2023年12月 「こども大綱」の制定



7

### ※ご参考：拡大資料

#### 母子保健法上の規定



8

ております。

左側に乳幼児健診の実施状況ということで書いてありますが、5歳児健診は今まだ15%ぐらいの自治体でしか実施されていないのですが、今年度の補正予算の中で課題として取り上げられてきて、今後、さらに広まっていくだろうと思います。

この5歳児健診というのは、言語能力や社会性が高まって、見えにくかった障がい者が認知される時期である4歳6か月から5歳6か月ぐらいの年齢をターゲットにして、特別、教育的に必要な児に対する早期介入を期待して実施するということになり。保護者にもいろいろな課題に気づいていただくといったことがポイントです。5歳児健診では、いわゆる気になる子供への支援というものが含まれているんだとご理解いただければと思います。

これは、5歳児健診の目的として書かれています。2番目には、子供の社会性の発達の評価、発達障がい等のスクリーニング、それから、子育て支援の必要性というところには、生活環境や養育環境、虐待なども書かれておりますけれども、そういった生活環境も含めた、いわゆる気になる子たちへの支援ということを目的とした施策ということになろうかと思えます。

この5歳児健診の進め方としては、市町村のどこかに集まっていたら、集団健診でやるというものの以外にも、例えば、巡回方式や、園医方式、園医さんを中心とし



### 今後は5歳児健診が展開

- 目的
  - こどもの特性を早期に発見し、特性に合わせた適切な支援を行う
  - ・ 幼児の健康の保持及び増進
  - ・ こどもの社会性発達の評価
  - ・ 発達障害等のスクリーニング
  - ・ こどもや子育てへの支援の必要性などの評価

健康を決定する社会的要因の評価、生活習慣や養育環境、虐待リスクの評価等

令和5年11月22日 こども家庭審議会成育医療等分科会 会議資料、永光参考人提出資料を参考に作成

10

### 今後は5歳児健診が展開

- 対象
  - ・ 実施年度に満5歳になる幼児（4歳6か月～5歳6か月）
  - ・ 幼児期において幼児の言語の理解能力や社会性が高まり、発達障害が認知される時期
  - ・ 就学時に特別な教育的配慮が必要な児に対して早期介入を実施
    - ➔ 発達課題について保護者の気づきや適応が向上

5歳児健診では、いわゆる気になる子への支援が含まれている

令和5年11月22日 こども家庭審議会成育医療等分科会 会議資料、永光参考人提出資料を参考に作成

9

### 5歳児健診から始まる支援

発達障害が認知される時期

就学に向けた支援・相談を開始

就学後の困難を軽減より高い自己評価

就学適応の向上へ

こどもや子育てへの支援の必要性評価

生活習慣保健指導

- ・ 運動習慣
- ・ 睡眠時間
- ・ メディア利用
- ・ 食習慣 等

健康を決定する社会的要因の評価

虐待リスク評価

➔ 支援・見守り

5歳児健診により学童期の不登校発生数が減少という報告もある

令和5年11月22日 こども家庭審議会成育医療等分科会 会議資料を参考に作成

12

### 今後は5歳児健診が展開

- 様式
  - ・ 原則、市町村保健センター等において行う集団健診
  - ・ 必要な児・保護者に対して多職種による専門相談及び健診後カンファレンスを実施
    - ※ 巡回方式や園医方式を組み合わせる場合を含む。
  - ・ 保護者の気づきや適切な支援につなげるための多職種による幼児・保護者等に対する相談支援（専門相談）

保育所など集団の中での課題についての情報が重要になってくる

令和5年11月22日 こども家庭審議会成育医療等分科会 会議資料、永光参考人提出資料を参考に作成

11

### 5歳児健診から始まる支援

就学後に直面する課題

就学後に特別な教育的配慮が必要な児童・生徒が約8.8%  
(学習面又は行動面で著しい困難を示している)  
文部科学省調査

増加する不登校児童  
不登校児の増加傾向  
(千人当たり：文科省)

就学前に支援を開始することで就学適応の改善を！

13

### ※ご参考：拡大資料

増加する不登校児童

不登校児の増加傾向  
(千人当たり：文科省)

14

で行っていただくといった、そういう意味では、園ともいろいろ協力関係を結んで進められる可能性が高いのかなと思っております。

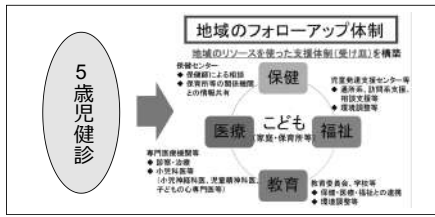
ですので、どちらにしろ、この年齢のお子さんたちの課題を知るためには、やはり保育所等の集団の中での課題が最も重要になってきますので、園関係の皆様のご協力の下で進めていくことだろうと思っております。

ともかく、5歳児健診の目標としては、どうやって支援につなげるかということですので、ちょうど発達障がい認知される時期でもありますので、就学に向けた支援を開始して、就学への困難を軽減していく。そして、就学適用、就学してからの適用を向上させるということが大きな目標ですし、それから、右側の子育て支援の必要なお子さんという中には、生活習慣や保健的な課題のある方、あるいは、虐待や貧困といったリスクを抱えている方、そうしたお子さんたちを拾い上げて支援していくということになります。

実際に5歳児健診を通じて、そのお子さんたちが小学校に入ってから不登校になった数が少なくなったといった報告もありますので、とても大事なことかなと思っています。

5歳児健診から始まる支援というのは、就学に直面する課題を少しでも軽減していくこととなります。今、就学後に普通学級にいらっしゃる教育的配慮が必要なお子さんが相当数いるということが、皆さんもよく新聞の報道等で聞かれているかと思いますが

5歳児健診の目的は保護者の気づきや適切な支援  
子どもたちにレッテルを張ることが目的ではない

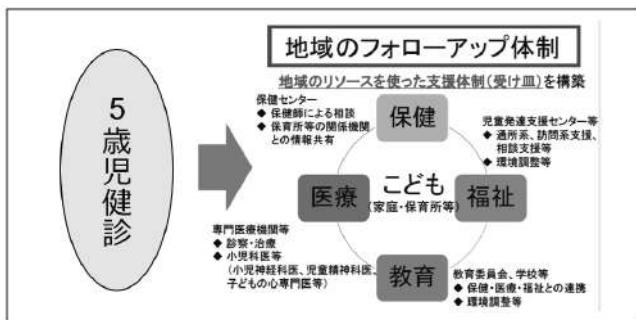


保育が今後どのように地域のフォローアップ体制と上手に連携していくか、大事なポイントになる

令和5年11月22日 こども家庭推進会議医療等分科会 会議資料、永光参考人提出資料を参考に作成

15

※ご参考：拡大資料



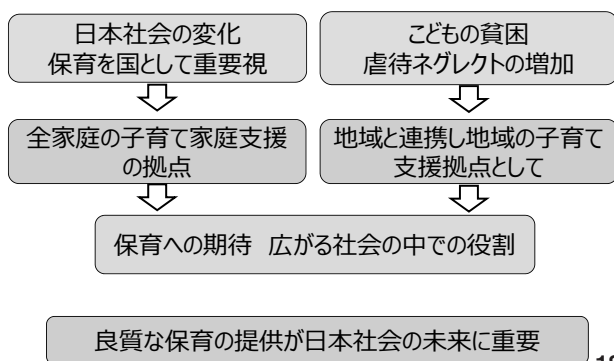
16

発達障害を理解することは

- 比較的頻度の高い特性や偏りのパターンを理解する
- その特性を持つ子どもの困った行動を理解する（なぜその様な行動をとるのか）
- そうした困った行動にどう対応したらよいのかを理解する
- そうした困った行動にどう対応してはいけないのかを理解する
- 子どもたちの望ましい行動を増やす
- 子どもと楽しい時間を過ごすことができる
- 子どもが学校で経験する困難を減らすことができる

17

保育への期待は大きい



18

すし、その中で、不登校のお子さんたちというのは、実は、最近、非常に増えてきています。残念なことですけれども、小学校から不登校のお子さんたちも増えてきています。それで、何とか就学前からニーズのあるお子さんを見つけて、できるだけ就学適用を改善できるようにしていきたいというところは、とても大事なことだと思います。決してレッテルを貼ることが目的ではなくて、ともかくどうやって支援をしていくのか。ですから、保育も、今後どのように地域のフォローアップ体制と上手に連携していただくのかということが課題になります。これは、どちらかというと保育の側をお願いすることになるかと思っています。

今日、お話しいただく中で、発達障がいの特徴のご説明があると思いますけれども、そうした比較的頻度の高い特性や偏りのパターンを理解すると、そういうお子さんたちの行動を理解することができて、どうしてそういうお子さんたちがそうするのかということが分かってきますし、どうしてそういうお子さんたちがそうするのかも理解できます。特に大事なのは、どういうふうに対応したらいいのかということも分かってくるかと思っています。そして、どうやって子供たちの望ましい行動を増やしていく、そのことが子供たちと楽しい時間を過ごせるポイントになってきます。それが、実は、皆様の施設から卒業していった、小学校に入ってから、子供たちが困ること、学校で経験する困難を軽減することにつながるということ、本当に大変な重要な

お仕事だと思っています。

今、日本の社会の中で、保育への期待は非常に大きくなっていると思います。これは、全家庭の子育て支援、家庭支援の拠点という形で位置づけられているのはつきり出てきておりますし、また貧困、虐待、ネグレクトといったところで、地域で連携して、地域の子育て支援の拠点としての役割も期待されているかなと思います。

やはり良質な保育を提供することによって、そういう方々が成人期になったときの生活のクオリティを上げるといっても、海外の知見では知られていることで、皆さんが本当に日本社会の未来にとっても重要な仕事をされています。本日、この後のお二人の先生方のご講演と、それから、その後の皆様とのディスカッションというのが、そうしたことに役立てばということでも企画をさせていただきました。

それでは、本日、どうかよろしくお願いいたします。

広瀬先生には医師の立場で、小児科医、そして、広瀬先生は子供の心の専門医、あるいは小児精神神経学会といったご専門の立場から、まず、ご講演を頂くことにしております。

それでは、広瀬先生、よろしくお願いたします。



# 発達障害支援のコツ

横須賀市療育相談センター 所長  
広瀬 宏之



今日、お話しさせていただきまず、広瀬でございます。

もともと僕は多動なものですから、動きながら話したいんですけども、Zoomを見ている方々は、あまり動いているとご迷惑かと思つて、じつとお話をしたいと思つています。よろしくお願ひします。

私は、もうほとんど医者というよりは療育センターの第一線で、2008年から横須賀の療育センターで発達支援をしておりますので、厳密な意味での医師の立場というよりも、むしろ療育センターの現場監督としての立場で少しお話をさせていただきます。

今日は、「発達障害支援のコツ」という題をつけましたけれども、まず前半で発達障害支援とは何かという一般的な概要からお話をさせていただきます。

その前に、そもそも発達障害とは何かということで、実は、現場で我々が発達障害の支援として行っているのは、いわゆるグレーゾーンと呼ばれるお子さんの支援が非常に多くなっている。障害とどこまで言うかどうかという話も後でしますが、微妙なお子さんへの支援で、それは先ほど岡先生がおっしゃったように、そういう段階で支援をすることが子供たちの未来を明るくするんだということで支援をさせていただいていきますので、発達障害とは何か、支援とは何かということも、また改めて皆様方に考えるきっかけになればいいかなと思つてスライドを用意してみました。一応、これはまだ日本ではICD-11は施行されていませんけれども、医療の世界では神経発達症という言い方をしております。厳密に考えると、発達障害と神経発達症は完全にはイコールではないんですけども、支援する立場としてはほとんど同じということ、スライド2のようにカテゴリーはされています。

ただ、このスライドで申し上げたいのは、実は、アンダーラインを引いた一文です。ここをお話したので持ってまいりました。

ICD-11(世界保健機関(WHO))による国際疾病分類の第11回改訂版)では、自閉スペクトラム症のところに、「格別の努力により多くの場面で適切に機能してい

るASD者に対しても診断は適当」と書かれています。ここが、実はすごく大事なところなんです。

なぜかと言うと、今までの医療の診断体系では、適切に機能している人に対しては診断しないというお約束です。これは、もう約束でしかないんですけども、適切に機能しているけれども、後でお話ししますが、凸凹がいっぱいあるお子さん、そして、子供だけではないです。大人もそうですけれども、そういう人たちに、ちゃんと毎日過ごせているから大丈夫だよと言ってしまうのは非常にリスクが高い。ずっと僕はそう思ってきたんですけども、ICD-11でも同じことが書いてある。この「格別の努力」というのがすごく大事な点だ。それを支えていただくのが、もちろん本人の努力もありますけれども、家庭であり、園でありということを少しお話をしたいと思つてこのスライドを持ってまいりました。

さあ、それで、発達障害です。この発達障害の定義で、何を発達障害と考えるかも、もちろんいろいろな考え方があります。

それはなぜかと言うと、体の病気と違ひまして、何か検査をして異常を見つけて、それで診断するというような考え方はなくて、いろいろな考え方があります。そして、私がいつも使っているのは、発達障害というのは生まれつきの発達の凸凹があつて、それプラス、日常生活の困り事。困り事の具体的なことは、今日のお話、特に佐々

木先生がいろいろなお話をしてくださいますし、後で質疑応答のところでも取り上げたいと思つても、とにかくこの困り事を何とかしなければいけないと思つているわけです。

そして、この困り事が多ければ多いほど、いわゆるグレーゾーンの濃い状態。障害として、先ほど、岡先生はレッテルを貼るとおっしゃいましたけれども、そうではなくて、支援が必要なんだというラベリング。レッテルとラベリングは同じかもしれないけれども、要するに困り事が多くて支援が必要なので、ちゃんと診断してもらいなさいという流れになるのが妥当だと思つています。

ただ、ご存じのように、診断をしなけ

## 神経発達症群

Neurodevelopmental disorders (ICD-11)

知的発達症 Disorders of intellectual development

発達性発話または言語症群

Developmental speech or language disorders

発達性学習症 Developmental learning disorder

発達性協調運動症

Developmental motor coordination disorder

自閉スペクトラム症 Autism spectrum disorder

格別の努力により多くの場面で適切に機能している ASD 者に対しても診断は適当

注意欠如多動症 Attention deficit hyperactivity disorder

常同運動症 Stereotyped movement disorder

2



## 支援にあたって考えるべき要因

- (1)人口の一割という高頻度
- (2)小児に限らない（家族も支援者も）
- (3)支援モデルの違い
- (4)支援のゴールを考える（大事！）

そもそも発達支援とは何か？

4

発達障害 = 発達凸凹 + 困りごと

個性	発達凸凹	発達障害
少ない	困りごと	多い
工夫		支援

グレー・凸凹・困りごと ⇨ 要支援  
 支援とは理解・工夫・配慮  
 「はじめに診断ありき」ではない

3

れば支援をしてはいけないうのかと言うと、そんなことは全然ありません。支援のスタートはグレーゾーンであったり、凸凹だけであってもいいですし、少し困り事があってもいいですし、要するに、医者の方が言うのも何ですけれども、体の病気と少し違って、診断がなくてもぜひ支援は始めていただきたいと思います。

もちろん、そこに適切な診断があれば、なお良いということにはなりませんけれども、ご案内のように、我々の業界でも、ちゃんと診断ができる医者を増やさなければとやっていますが、なかなか追いつかないということがございますし、別に診断があっても、なくても支援はできるということで、必ずしも初めに診断ありきではないということはお伝えしておきたいと思います。

そして、支援というのは、この後、少しお話をしますけれども、まず、その子の特性、凸凹を理解していただくこと。どんな凸凹があって、どんな工夫や配慮があるとその子の困り事が減って、日常生活をスムーズに流れるのか。そういう枠組みで発達障害の支援を考えています。ですので、今日お話しするのは、むしろ発達凸凹の支援というほうが正しいのかもしれません。

その支援に当たって考えた要因ということで、一応、4つ挙げてあります。先ほど、通常学級に8.8%というデータがございましたけれども、これは通常学級であって、全人口を考えると大体1

割ぐらいだというのが定石だろうと思います。

ただ、現場感覚としては、1割以上はいるなど。先生方も、クラスで見ただけだと分かると思いますが、1割ではきかないのではないかと。診断される、されないというところで線が引かれますけれども、診断はされないけれども、やはり少しグレーゾーンで支援が必要だよねという人は1割以上はいるかなと思います。とにかく、1割だとしても、日本中で1,000万人ぐらいの人がそういうふうにか該当するわけですから、それだけの高頻度を、誰が、どこで、どう支えるかということは、また改めて考えなければいけないと思います。

そして、スライド4に書いてあるように、小児に限りません。家族もそうですし、支援者も結構凸凹がいろいろあります。

それで、凸凹バイアスと私は言っているんですけども、その支援者、自分の話をするのが一番いいと思いますけれども、自分はじつとしていたのが昔から苦手で、それに気づいたのはこの業界に入ってから。それで、いろいろ考えてみると、自分にもいっぱい特性があるなというのは、今、嫌というほど痛感を感じていますが、自分は動きが多いものですから、多動の子には少し甘いんです。これぐらいいいじゃないかと思ってしまうんです。だけど、幼稚園や保育園の先生に言われると、「先生、困るんです」と。それはそうですよね。

それから、もう一つ、実は、大きな声では言えませんが、これ、全国に中継されているんですよ。大きな声では言えませんが、僕は空気を読むのが非常に苦手です。それを自覚したのも、最近、10年ぐらい前です。僕は空気を読むのが苦手、状況判断が苦手ということは、すごく親から厳しく言われてきましたので、状況判断が苦手なことに対しては、非常に僕は厳しい。多動に関しては、怒られた記憶がない。多分、怒られているんですよ。忘れてしまっているんです。そこは甘いんですよ。だから、支援者の中にも凸凹バイアスがある。

凸凹バイアスがある支援者が子供たちのアセスメントをする、親のアセスメントをする。やはりここが体の病気と違うところで、肺炎を診断するときに、支援者が肺炎にいったいかわかったことがあるからというバイアスがかからないわけです。レントゲンを撮って、聴診をして、血液検査をして、場合によっては喉をぐりぐりとすればバイアスがかからないんですけども、発達障害の場合は、支援者の凸凹バイアスが非常に大きい。それは、取ることはできないと思います。ただ、やはり自覚はしておいたほうがいいかなと思います。

私は、自分で自覚をしているので、気をつけなきゃなと思っていますけれども、そういう凸凹バイアスというのが、最近すごく大事だなと思っています。



それから、支援のモデル、支援のゴールというのは、この後、スライドで少し具体的にお話をしたいと思います。

今日のお話、佐々木先生のお話もちろん含めてですけれども、発達障害支援ではなくて、発達支援とは何かということ、今日、聞いていただいている皆さんに改めて考えていただける契機になればうれしいなと思っています。

スライド5に「支援モデルの変遷」と、一応書きましたけれども、これは発達障害の支援であっても、精神障害の支援であっても、それから、体の病気の治療支援であっても同じことかなと思いますけれども、もともと僕はドクターなので、やはり最初に来るのは医療モデルです。

それで、トレーニングを受けて、教育を受けてきました。医療モデルというのは、物すごく簡単に言ってしまうと、検査をして、何か原因を見つけて、治療して、治していくというモデルです。

これを発達障害に当てはめると、いいことは、たまにあるんですけど、あまりうまくいかないというところは、この次のスライドでお話をしたいと思います。

その次に、特に発達障害支援で出てきたのが、療育モデルということで、健診などで遅れがある子、それから、言葉を選びますけれども、定型から少し外れている子をピックアップして、療育センターに集めて、訓練をして、社会に戻していくというの

## 支援モデルの変遷

- (1) 医療モデル：原因追求→治療根絶
- (2) 療育モデル：集めて訓練していく
- (3) 社会モデル：個に応じた社会参加

5

## 医療モデルの弊害

- (1) 診断≒悪いもの（病巣）探し  
治療≒悪いもの退治（凸凹の根絶）  
凸凹や特性を「活かす」視点の欠如
- (2) はじめに診断ありき、になりがち  
（支援に医学的診断は不可欠ではない）  
適切に診断・支援できる医師の不足  
“待機問題”が生じてしまう  
「治す」から「活かす」への発想の転換

6

が療育モデルなのかなと思います。

かなり昔は、発達障害の頻度が、例えば100人に1人とか、1,000人に1人と考えられた時代は、それでも、まだ何とか間に合いましたけれども、今や10人に1人以上ですし、ご存じのように専門機関は、かなり増えてきましたけれども、なかなかニーズには追いついていない状態です。療育機関、児童発達支援施設、児童発達支援センターに集めて訓練をしていってとなると、ご存じのように待機が1年とかうちのセンターは、今、2か月、3か月で短いほうだと思いますけれども、それでも世間一般的には、えっ、2か月待つんですかという話になるわけです。

ですので、療育センター、専門機関に集めて訓練していくというモデルも一部有効ですけれども、それだけでは成り立たない。やはり社会モデル、生活モデルといって、スライド3の発達の凸凹があっても、日々の生活、毎日が穏やかに、スムーズに、その子なりに生活できるということ。それから、これも後でお話をしますが、その子、その子に合わせた社会参加をどんなふう考えていくかが、1つの社会モデルだろうと思います。

医者ではないと言えないと思うので、「医療モデルの弊害」と書きましたけれども、やはり診断というのは、基本的には悪い物探しなんです。治療というのは、悪いもの退治になるわけです。百歩譲って、発達の凸凹を探すというのはあってもいいと思いますけれども、それを悪いものだと考えて、なきものにしようという発想ですと、いろいろな意味で問題が生じてきます。優生論的発想にもつながりかねないと思いますので、僕は基本的には、凸凹や特性は生かすものだと思いますので、治療や診断根拠という考え方をとるのはどうかと、日々思っているところです。

なので、「発達障害は治りますか」という質問をよくされますけれども、治るとか、治らないとか、そういうものではないんですけど、毎日のお話を少しつく、丁寧にしていっていただいても、治すとか、治らないではなくて、毎日の生活が穏やかに、スムーズに、その子なりに生活していければいいかなというお話をいつもしています。そのお話を、このお話の一番最後のところで、また戻っていききたいと思います。

それから、これももう既にお話ししましたけれども、医療モデルを使ってしまえば、初めに診断ありき、医学的診断がないと支援ができないといったことはいわゆる、診断ができる医者がどれだけいるか、待機問題が生じてしまうかみたいなことで、診断がなくても支援が始まるようなシステム、それから、「治す」から「活かす」への発想の転換が大事かなと思っています。

スライドにはありませんけれども、横須賀の療育センターには医者がいるものから、私、今日、午後の外来を閉じて、代診の先生にお願いしてきましたけれども、

どうしても診断は全員につけています。ただ、診断がつく前から支援は開始するよう  
にしています。

お母さんたちから電話がかかってくるわけです。保育園や幼稚園、学校から言われ  
て、こういうことを言われたので、少し相談したいんです。もう電話の段階で支援  
は開始。具体的には、個人情報や取り取りになりますので、お母さんたちの許可は要  
りますけれども、保育園や幼稚園、学校の様子を電話でやり取りをして、どんな感じ  
ですか、どういうことでご紹介いただいたんですかみたいところで、間接的な支援  
ですけれども、始めています。

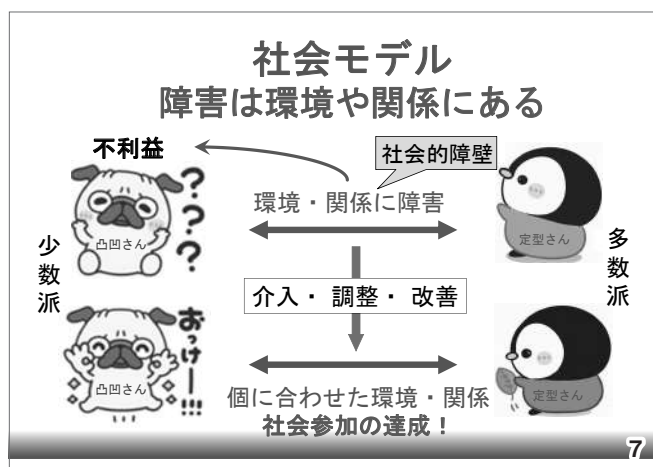
その後、うちのセンターの場合は、診察の前に心理士が検査をとりましますので、そこ  
でお子さんのプロフィールがほとんど分かります。その段階でも必要があれば支援を  
継続していく。

例えば、年長さんのお子さんで、12月ぐらいにいらっしゃって、検査をしたら知能  
指数が70だったという結果がよくあるんです。それで、初診が3月で、もう4月から  
小学校だとなってしまいうわけです。もたもたしている、支援級に入るかどうかは別  
として、やはり支援級という選択肢も考えてほしいわけですから、例えば、12月だと、  
今、うちのセンターでもぎりぎり間に合わないんですけれども、地区によっては間に  
合う方もいるかもしれませんが、まず最初にやるべきことは、教育委員会と連携をとつ  
て、お母さんたちに教育委員会に行ってもらうことだろうと考えています。検査で急  
ぐような場合、それから、知能検査だけではありません。難聴のことだったり、脳性  
麻痺だったり、横須賀はうちのセンターしかありませんので、ありとあらゆる全ての  
発達の子がうちに来るんですけれども、診察の前にできることはやりたいなどと思つて、  
スタッフみんなでいろいろなことをやっている。なので、「診察は後回しでいいよ」  
といつも言いながらお話をしています。ちょっと余談です。

それで、社会モデルも、もう本当に釈迦に説法で、これは僕と岡先生の後輩である、  
熊谷晋一郎さんの講演を聞いていて、ちょっと自分なりに思いついて書いたスライド  
なんですけれども、僕は、障害というのは個人にあるものではないというのが社会モ  
デルだと理解をしています。凸凹さんと書きましたけれども、これは、障害がある、  
ないというよりも、単なる凸凹さんで、少数派なわけです。今、発達障害の人が大体  
1割ぐらいとお話をして、もしかしたら、100年後ぐらいになると、この少数派と  
多数が逆転してしまうかもしれない。定型発達のほうが少なくなってしまう世の中が  
来るかもしれない。そうしたら、定型発達の人が障害者と言われるのかと言うと、そ  
んなことはないわけです。

そうではなくて、社会モデルの考えにのっとれば、この凸凹のある人が社会参加で

きていない社会的障壁、関係や環境に障害があるんだ。そういうふうに見える、この  
社会的障壁を、何とかそこに介入して、調整して、改善していこうと。これがすごく  
大変なんですけど、でも、やはりこれはやらなければいけない。そうすると、その人  
その人に合わせた環境や関係、それから、その人に合わせた社会参加の達成ということ。  
あまり個別の事例をお話するまではないと思えますけれども、いろいろな障害の  
ある方が国会議員になったり、地方の議会の議員になったり、最近では、身体障害の  
ある方が文学賞を取られたり、いろいろな場で活躍されています。それまでは、そう  
いうことはなかなか難しかったわけです。難しかったけれども、社会的障壁が大分取  
り払われて、ちゃんとその人なりに社会参加できるようになっている。我々の後輩の  
熊谷晋一郎さん。これは有名なのでいいかなと思えますけれども、いろいろなハンディ  
キャップがありながらも、大学に入学して、小児科に入学して、医者として活躍して、  
今は社会モデル当事者研究の第一人者として活躍されている。彼のたどってきた道も、  
まさに社会的障壁を切り開いてきたんだらうと思います。なかなか大変な道ですけれ  
ども、その人、その人に合わせた社会参加をしていく。その第一歩が幼稚園、保育園、  
その前に公園デビューというのがあるかもしれないんですけど、最近、公園デビューとい  
うのは少し死語になっておりますので、幼稚園、保育園、保育園の集団での社会参加をどん  
なふうに進めたいかというのが、先生たちの本当に大事な大事なお仕事なんだろう



### 社会的障壁

社会参加を妨げる事物、制度、慣行、観念その他一切

(1) 制度・体制 (ハード面)  
物理的な配慮不足、利用しにくい制度・手続・施設・設備  
交通や移動などでの不備・不利 **こっちが重要**

(2) 意識・考え (ソフト面)  
先入観・偏見・差別 (≠区別)・排除  
障害の否定・無理解・「努力不足」「精神論・根性論」  
同調圧力・間違った平等意識・個別配慮の否定  
家族と支援者の内なる社会的障壁への気づきがとても重要

と思います。

スライド4の社会的障壁。これも難しいことを言うと、ここに書いてあるとおりなんでしょうけれども、簡単に言えばハード面とソフト面、物理的な制度や体制の障壁と、それから、それはまだ目に見えるような障壁ですので、比較的まだ分かりやすい。問題なのは、意識や考え、勝手にソフト面というお話をしましたけれども、先入観や偏見、差別、排除です。それから、こんなのは障壁ではないなど、障害の否定ですね。それから、よく聞かれるのは、診断するなんてかわいそうだと、発達障害と診断するのかわいそうだというのが、もうまさに社会的障壁なわけです。かわいそうだから診断するわけではなくて、的確な支援が必要だから診断というか、見立て、アセスメントをするわけです。

それから、努力が足りない、子供も親も努力が足りない、気合が足りないという根性論ですね。こういうのは、まだ後を絶たない。

それから、反対に、みんな同じでなければいけないという同調圧力、個別配慮の否定、おまえだけ特別扱いできないんだぞと言われます。けれども、特別支援教育というのは、一人一人の教育的ニーズをきちんとアセスメントして、それに見合った教育をしていこうという特別支援教育の理念であります。保育園や幼稚園を見ていると、本当に一人一人に合わせた理解と支援をしていただいて、本当に頭が下がる思いですけれども、例えば、小学校に入ると、いや、特別扱いできない。特別扱いできないということが社会的障壁になっているということです。

例えば、読み書きが苦手なお子さんというのは、スマホやタブレット、電子機器、ICT機器を使いながら学習をしていく。それも、地域によってはまだなかなか普及していない。授業中、1人でタブレットを使っていると、「おまえだけずいぞ」みたいなことを言われてしまったりするわけです。でも、そうではないわけです。僕もそうですけども、眼鏡をかけている人が、「おまえだけ眼鏡をかけていてずいぞ」と、昔、言われたことがあります。うん十年前に。だけど、今、そんなことを言ったらもうバツなわけで、そういうことが発達障害のお子さんというのは見えにくい障害なので、なかなか理解が得られないというの、やはり社会的障壁のすごく大きなこと。それから、さっき凸凹バイアスと言いましたけれども、家族や支援者が発達障害に対する偏見、社会的障壁みたいなものがないとは言えないわけです。

あまり生臭い話は今日はしないほうがいいと思うんですけども、こんなことは、よく我々の業界であるわけで、例えば、ADHDという状態があります。それから、自閉スペクトラム症という状態があります。今日、僕も佐々木先生も、あまり個別の病気の話はしないんですけども、この間も外来に来た方で「ADHDかと思っ

ました」と言っても、いろいろやってアセスメントしてみると、いわゆる自閉スペクトラム症という状態なんですね。

「ああ、ADHDだと思っていたんですけども、自閉スペクトラム症ですか」と言っても、すごくがっかりしたような、嫌そうな、残念そうな顔をされるんですね。要するに、ADHDならいいけれども、自閉スペクトラム症だと……みたいな状態が、やはり支援者の中にもあります。家族の中にもあります。皆さんの中にもあると思います。でも、どちらがいいとか、悪いとかではない。支援が必要な状態であること。それぞれ違った支援が必要な状態であることは間違いないんですけども、どうしても我々の中にも、僕の中にだってあります。だから、それをゼロにできればいいですけども、ゼロにできない以上は、我々も自分の中に社会的障壁があるのではないかと、少し振り返ることはすごく大事だろうと思います。

さて、少しずつ具体的な話をしていきます。

私、29年前に小児科医になって、いろいろな理由があって小児科医になったんですけども、定型発達のお子さんを見てみると、1歳になったらしゃべるし、歩くし、おしゃべりもだんだん増えていくし、運動能力もよくなっていくし、そのうち反抗期が来るし、親離れしていくしというので、放っておいてもよい、とは言いませんけれども、それなりに発達はいくんです。肺炎とか、気管支炎とか、胃腸炎とか、体の病気を視察していても、あんなにぐったりしていた子が、少し治療して点滴をしたら、「バイバイ、先生。さようなら」と言っても、元気になって帰っていく。治るっていいなと思いつつながら小児科医をやっていたんですけども、気づいてみると、そうではないんです。発達のお子さんを見るようになって、なかなか発達しない。子どもを持つお母さんたちに「どうやったらしゃべるようになりますか」「どうやったらじっとできますか」「どうやったら空気を読めるようになりますか」と聞かれます。それは僕が知りたい、自分が知りたいといつも思いながら、さあ、どうやったらこの子たちが発達するんだろうとずっと考えてきて、現段階では、やはり成功体験の積み重ね。それは、定型発達のお子さん、大人もみんなそうですけども、特に発達に課題のあるおさんは、成功体験の積み重ね。それは、皆さんのお力を借りながら成功体験を積み重ねていくということが、すごく発達には大事なんだと考えています。

ところが、「避けたい悪循環」ということで、発達の凸凹のあるおさんは、もともとうまくいかなかったことが多いわけです。けれども、子供は、先生方ご存じのように、初めからやらない、初めから諦めているという子はいなくて、初めは、その子なりにいろいろなことを頑張つて、コミュニケーションをとろうとしたり、歩こうとしたり、意思を伝えようとしていたり、手伝おうとしたり、やるんですね。だけど、うまく



## 避けたい悪循環

- ☑うまくいかなことが多い
- ☑怒られる回数がうなぎのぼり
- ☑頑張っても怒られるだけ
- ☑挑戦や努力をしなくなる
- ☑自尊心の低下「どうせ俺なんか・・・」

(アフターフォロー無き)  
失敗は二次障害のもと  
困る行動・問題行動が増え  
その子の本来の発達が失われる

10

## 「できた！」が発達の原動力

### 成功体験の積み重ねが大切

9

いかなから「何やっているの」と怒られてしまうわけです。怒られる回数が多いことも多い。それは、無理もないと思います。

だけれども、そうすると、だんだんそれだけでアフターフォローがないと、頑張っても怒られるだけ。それで、だんだん努力や挑戦をしなくなる。専門用語では学習性無力症と言いますけれども、頑張っても頑張っても、どうしてもうまくいかないから無力感にさいなまれる。これを学習性無力症と言いますけれども、頑張っても努力や挑戦をしなくなる。そして、どうせ俺なんかという、もうこうなると、立派な二次障害、あるいは二次障害の一手前です。これはやはり避けたいですね。

なので、うまくいかないことはもちろん多いんですけども、そこでみんなサポートしてあげて、怒られる回数を減らす。そして、うまくいって、本人のドヤ顔ですね。最近、ドヤ顔は死語になってきていますけれども、それを増やしてあげるといことが大事なんだと思います。なので、「失敗は成功の母」、失敗してもいいんだというのは、発達障害に関してはバツです。僕は、「失敗は二次障害の基」なんて勝手に言っているわけですね。困る行動や問題行動が増えて、その子なりに成長、発達していくはずなのに、バツがいっぱいついてくると、その子の本来の発達も損なわれてしまうということになります。

ただ、この話はしょっちゅうしているんですけども、この間、あるところでしたら、「広瀬先生、最近のお母さんや園の先生も含めて、失敗を極端に恐れて、失敗することが悪であるかのように全部手伝ってしまつて、全部お膳立てして、あるいは失敗しそうなことにはチャレンジさせないみたいな、本当に失敗を全て諸悪の根源であるかのような風潮は結構ありますよ」と言われて、確かに、そう言われてみれば僕もそうだなと思つたんです。

だから、失敗をしてはいけないということではなくて、失敗をした後に何もアフターフォローしないで、「何でおまえ、そんなことをやつたんだ。自分で考えてもう一回やってみろ」と突き放してはいけないんだと。失敗をしたら、では、今度はどうやったらうまくいくか、ハードルが高いのか、いろいろな感覚過敏が抵触しているのか、それから、発達を待たなければいけないのか、時間を待たなければいけないのか、失敗した後にみんなで少し分析をして、アフターフォローしてあげる。今度は成功する、あるいは、今はそのときではないから、しばらくしてからできればいいんだよと時を待つてあげる。トイレトレーニングなどは特にそうですけども、時を待つてあげる

と自然にうまくいくことはあるわけです。ですので、「アフターフォローなき失敗は二次障害の基」というのが、多分、正確。そのアフターフォローを、先生方は日々、現場でされているんだろうなと思います。

## サポートのキモ ハードルは低く こまめにほめる 難しいことは手伝う

11

だけれども、やはり失敗、失敗、また失敗というのは、あまり発達にはいいことではないなということはお伝えしておきたいと思います。

ですので、「サポートのキモ」と書きましたけれども、これができると、我々、療育の仕事はほとんどなくなるぐらい。皆さん、特に親ごさんのハードルはやはり高いんですね。分かるんです。全然しゃべらないから、何とかしゃべらないか、言語療法できないのかとか、おむつがとれないからとか、それから、じつとしていないから、目が合わないからとか、いろいろ心配されて、無理やりハードルを上げてしまうんですけども、やはりハードルを上げ過ぎるのはいいことでは

ない。かといって、下げ過ぎて、「いや、いいよ。何もなくていいよ。何もなくていいよ」と言うのもよくない。ちょうどいいということがすごく難しいんですけども、ちょうどいいハードルにする。ただ、一般的には、僕たちから見ると、親ごさんたちも、先生たちもハードル高いな、少し下げてもらえるといいのになと思うことは多いです。それが1つです。

それから、小まめに褒めるということ。この褒めることについては、また次にスライドでお話ししますが、ちょっとしたこと注目をして褒めていくということが、褒められるというのはいいことだし、褒められてちょっと照れくさそうな、ツンデレ的な顔をするお子さんもいますけれども、やはり褒めるといのは大事なことだろうと思います。

それから、難しいことは手伝うということ。手伝うことを決して罪悪視してはいけないと思います。最初のうちはできないことが多いお子さんですので、最初はちゃんと手伝ってできるようにしてあげる。「ああ、できた、できた。ほとんど俺が手伝ったんだけど」。それでもいいんです。先生がほとんど全てフルアシストだけで、最後にできたというドヤ顔は子供にあげてほしいなと思います。

そんなことを言っていると、時々、外来に来たお父さんから、「いや、手伝っていたら、大人になっても手伝い依存症になってしまうのではないですか」と。

いや、そうではないんですね。大人になっていく過程で、だんだんその手伝い、サポート、手出し、口出しは減らしていけないと、ずっと手伝っていたら、もちろん何もできない大人になってしまいますけれども、その過程で、だんだんそのサポートは減らして自分でできるようにする。そのさじ加減、減らし加減、最初にどれくらい手伝って、だんだんというプロセスで減らしていくかというの、これももちろん腕の見せどころですけれども、何も手伝わないで、できないと、スライド10のような悪循環になってしまうということです。ですので、この3つをお母さんたちにもお話をして、大事にしてもらっているということがあります。

スライド12は、褒めるコツです。  
実は、これ、「親も！」と書きましたし、この間の講演会では、「支援者も！」と書いて苦笑いされたんですけども、親ごさん、ぜひ褒めてあげてください。後で保護者対応のコツは少しだけお話ししますが、親ごさんもぜひ褒めていただければと思います。

褒めるというのは、何で褒めるかと言うと、褒められた行動が定着してほしいわけです。例えば、学校の例で言えば、宿題をちゃんとやる。家に帰ってきたらすぐ宿題をやるという行動ですね。なかなかめったにやらないから、「何でいつもやらないの」

と怒られるわけです。僕は宿題の話が一番しやすいで宿題の例でお話ししますが、家にも、家に帰ってきて、今日は珍しく宿題をやっている。「今日は宿題をやっているね。偉いね」と。「偉いね」って、自分の口癖なので、どういう言葉を使ってもいいんですけども、とにかく、片目で見えてふーんみたいなことではなくて、ちゃんと肯定的な注目を言葉に出して実況中継してほしい。「今日はちゃんと座っているね」とか、「今日は順番を守れたね」とか、「今日は言葉で言えたね」「何でもいいんです。できたことをちゃんと言葉で言って、その言葉がどれくらい伝わっているか。いや、そんなことを言ったって、小さい子供は分からないでしょう。そんなことはないんですよ。先生たちがご覧になっているように、こちらが子供たちに何か褒めてあげれば、100%理解できているかどうかは分かりませんが、やはりうれしそうに顔はしますので、珍しくいいことをやったときは、言葉にして褒めてあげてほしいなと思います。

そこで、今、僕、「珍しく」とか言いましたけれども、どうしても、「あら、珍しいわね」と言いたくなってしまふんですね。それから、学校から帰ってきてすぐに宿題をやっていたら、「どういう風の吹き回し」とか、それから、「何でいつもやらないの」。出た。「何でいつもやらないの」と。珍しいんですよ。せっかく子供が珍しくやって、皮肉とか、嫌みとか、「あしたからちゃんとやりなさい」。何でいいことをやっているのに怒られるんだとなるわけですね。だから、「皮肉や嫌みを言いたくなるのはすごくよく分かりますけれども、ぐっとこらえていっぱい褒めてあげてください」と、お母さんたちにも言っています。

## ほめるコツ

親も！

- (1) 小さな（良い）変化を見つける
- (2) 肯定的注目を実況中継＝言語化
- (3) 伝わる褒め方：皮肉嫌味は禁句

\* 目標 \*

やってほしい行動の定着  
行動や人格の価値判断ではない

12

ですので、いいことをやったら言葉にして褒めてあげる。別にいいことをやらなくても、外来などに来ると、僕はいつも「大きくなったね」と。子供は大きくなるので、「いや、小さくなりました」と言う子はめったにいないので、でも、「大きくなったね」と言うと、みんなうれしそうに顔をします。もうそれはいつも定型句として使っているんですけども、ポジティブなコミュニケーションとしても、「大きくなったね」と言って、

またどんどん大きくなられても、親ごさんは「いや、太り過ぎて困るんですよ」とか言われるんですが、それは置いておいて、「面白いTシャツを着ているね」とか、僕は鉄道が好きなので、それは置いておいて、「面白いTシャツを着ているね」とか、僕は「いね」といつも言ってしまう癖がどうしてもあるんですけれども、やはり行動の定着だけではなくて、いいコミュニケーションとしても、ちゃんと言葉にしていってあげるといふことが大事だと思います。

ただし、いつもそういう話をしていると、ある子供から、「俺、全然褒められないんだよね。もう生きていてもしょうがないのかな」と。その子は発達凸凹もすごくあるんですけれども、とつても頭がいい子で、「全然褒められないんだよ。褒められないという事は、俺は生きていてもしょうがないのか」と。「いやいや、あなたは生きていてくれるだけですよ」「また先生、言っちゃって」なんて言われて、いいことを褒められる。褒められないと良くない。人間として失格だ。そうやってしまうことがあるんですね。

だから、褒めるのはもちろん必要ですけども、褒めるレベルはあまり上げないほうがいいかなと。いいことをしたら褒められるではなくて、存在として言葉にして褒めてあげる。電車のTシャツを着て来て、「おっ、すごいね」と。別に価値判断をしているわけでも何でもないわけです。いいとか、悪いとかではなくて、注目して言葉にしてあげるといふことは、やはり大事だろうと思います。

時間がよく分らなくなってきましたが、私の前半のスライドのまとめです。

発達障害のあるお子さんがどんなふうに対応していくかということです。最初は、周囲が凸凹、苦手なことを理解して、配慮して、この後に成功体験の蓄積という一文が本当は入るんですけども、成功体験を少し蓄積させていくこと、日々の生活が改善していく、その子なりの成長、発達がちゃんと担保されるというのが第1弾です。

ただ、僕は人口1割以上の発達の人間、お子さん、大人も含めて、全員が全員支援につながるのなかなか難しいだろうと思います。ですので、最終的には、さっき自分が自己開示したように、ぜひ自分の凸凹を自覚して、自分で対処する子になってほしいなと、僕はそこが1つのゴールだと思っています。

だけれども、自分の凸凹を自覚するというのは、僕だって30過ぎて、やっとこんな凸凹あるんだと。それなりに医者になって何年目だったかな。5年目ぐらいだったと思いますけれども、自分が雷に打たれた瞬間、今でも覚えていますけれども、多動なんだ。あっ、気づいた。「今頃何を言ってるんだ」と同僚に思われていますけれども、ある程度、子供たちもそうです。自分の余裕、日々の生活が怒られてばかりとか、

学校も行けないとか、なかなかバツがいついっている状態だと、自分の凸凹は自覚できないと思います。

ですので、ある程度落ち着いたら、こういうところが苦手。それは、障害があるとか、ないとか、告知をするというレベルでは全然なくて、あなたにはこういう凸凹があるんだよ。自分で分かってくるところもありませんし、苦手なところもありますし、では、どうしたらいいか。今まで我々も一生懸命考えてきたけれども、あなたなりにアイデアはないかなと。それで、だんだん自分でセルフケア、セルフヘルプができるようになってくるのが、僕は全生涯にわたった発達支援の1つの流れだと思っています。

なので、僕は親ごさんにも、よっぽどではない限りは、凸凹の子供の凸凹の話を外來でした後に、「ちなみにどちらに似ていますか」と、ほぼ全員に聞きます。

こちらとしては、親ごさんと30分、1時間お話をしていると、こちらに似ているのかなというのは仮説としてあるわけで、昨日来た親ごさんも、お子さんにご説明をして、紙で渡したら、私のことが書いてあるみたいだとおっしゃっていて、もうそれは話も済むんですね。お母さんもちゃんと自覚をされているし、全然お母さんは不適応はないんです。上手に生活されていて、適応はちゃんとされているんですけども、お子さんはかなりなASDのお子さんで、僕は全然お母さんには見えなかったんですけれども、「私もそっくりです」と

## 適応過程

### 周囲の理解と配慮

↓  
日々の生活が改善していく

↓  
自分の凸凹を自覚できる

↓  
自分で工夫するようになる

13

言うから、ああ、そうか、お母さん、自分なりにいろいろ工夫されて、自分のことをサポートしているんだねというお話をしたら、「そうなんです。大変なんです。生きづらいんです」というお話をされて、では、そのお母さんの自分のセルフヘルプが、少しお子さんの支援にどこかつながるかもしれないねというお話はしたんですけども、やはり自分の凸凹を自覚。これは、さっきから言っているように、凸凹バイアスと関連しますから、我々支援者も、ぜひ自分の凸凹を、僕みたいに人前で言う必要はありませんけれども、自覚していただくと、支援者としても、生活としても、少し楽に

なる。気づいたらがっかり来ることもあるわけですが、やはり自覚という言葉は、大人の発達障害の支援の一番のキーワードではないかなと、少し脱線ながら私は思っています。

それで、支援の話につながるんですけども、結局、支援の場というのは、最初は家庭なわけです。家庭、その後、幼稚園、保育園、こども園、学校、集団、もちろん会社というのがありますけれども、そして、最終的には、理想は理想なので、現実とは必ずしも一致しませんけれども、自分自身で自分の凸凹を理解して、セルフヘルプ、自己支援できるというなと思います。

なので、専門機関。僕は今日、「専門家」という言葉をすごくざっくりとして使っています。専門家というのは、子供の専門家という意味で使っています。なので、今日、聞いていらっしゃる方は全員専門家なんですけれども、このスライドで使っている専門機関というのは療育機関のことです。すみません。ちょっと言葉が足りなくて、だから、療育機関というのは、しよせん、皆さんの支援の下支えをする存在であるべきだと思っています。

さつき岡先生がすごく大事なスライド、発達障害を理解する重要性というスライドでさらっとお話をされました。それと全く同じです。医療機関なので診断はついて回りますけれども、子供の見立て、それから、どういうアドバイスをするか、そして、

## どこで支援するか？

- (1)家庭
- (2)集団
- (3)自分自身
- (4)専門機関はこれらの下支え
  - ①見立て（含む診断）
  - ②アドバイス
  - ③機関連携
  - ④治療や訓練（含薬物）

14

## 療育でしていること

### (1)アセスメントする（みてる）

- ・子どもの状態像をアセスメントする
  - ☞ 過去（発達）、現在（現象）、未来（方向性）
- ・ケースのニーズをアセスメントする
  - ☞ 子どもの状態像から見た必要性&≠親の願い・思い

### (2)直接支援

- ・ケース・ワーク
- ・カウンセリング
- ・専門スタッフ（心理・PT・OT・ST・保育等）による療育
  - ☞ 個別療育、小集団療育、通園療育、薬物治療など

### (3)間接支援

- ・巡回相談・地域支援・地域連携
  - ☞ 地域で暮らせるよう、地域に戻していく

15

## 専門機関の“使い方”のコツ

- (1)地域によってリソースが違う
- (2)「駄目だから療育」ではなく・
- (3)「園が困っているから」もあり
- (4)専門機関への依存と期待は禁物  
(あてにし過ぎない)
- (5)療育センターは通過点に過ぎない
- (6)押したり引いたり（POINT制）

16

機関連携。そして、治療や訓練というのは、おまけとまでいきませんが、位置づけとしては、そんなに大きくないということになります。

スライド15は、10年ぐらい前に作ったスライドを久しぶりに引っ張り出してきたんですけども、療育で何をしているか。いろいろなことをやっているようにですけども、結局、アセスメント、子供の状態像をアセスメントするということが、それから、ケースというのは、子供と子供を取り巻く環境の意味で僕は使っています。家族、それから集団です。しばしば、いろいろなニーズは合いません。子供のニーズ、親のニーズ、園のニーズ。園は非常に困っているから療育センターに行ってほしい。親さんは困っていない。家では困っていない。本当に困っていない場合と、家でも困っているけれども、困り事を自覚されていない場合と、いろいろありますけれども、この親の願いや思い、それから、幼稚園、保育園、こども園の願い、思いと、あと、子供の状態像と、その辺のごちゃごちゃとしたニーズを少し整理していくのが、狭い意味での療育機関の役割ではあると思います。

それから、直接支援。今、療育センター、児童発達支援事業所センターの中でやる支援というのは、どんどんどんどん比率としては小さくしていくべきだろうと思っっています。もちろんいろいろな民間の事業所さんが介入して、支援の場は増えていますけれども、ご存じのように、それでもニーズには追いつかない。

やはり僕は、一番下に書いてあるように、地域で暮らせるように、地域に戻していく。間接支援と書きましたが、我々のセンターだったら、巡回相談をしたり、保育所等に訪問支援をしたり、地域支援をしたり、地域連携をしたり、今日のお話も1つの間接支援だろうと思っただけですけれども、いろいろな凸凹や遅れがあっても、地域で子供たちがちゃんと暮らしていける、その子なりに暮らしていけるのが、支援で一番やらなければいけないことだろうと思っっています。アウトリーチという言い方をしてもいいのかもしれませんが。

なので、「療育機関の『使い方』のコツ」なんて勝手に書きましたけれども、地域

によってリソースが本当に全然違う。国の制度としては、ちゃんと法律に書いてありますけれども、地域によってリソースが違うので、それぞれの先生方の地域のリソースを上手に使っていただくしかないんだろうなと思います。

それから、ご質問でよく頂くんですけども、「では、どうやって専門機関につないだらいいんですか、親ごさんは行きたがっていないんですけれども」という話があるんですけども、駄目だからとか、遅れているとか、これができないから療育センターへ行きなさいと言うと、親ごさんは分かっているんで、余計嫌なんですよね。いや、そんなの言われなくて分かっていきますみたいな、駄目だから療育となると、園にレッテルを貼られましたと。そうではないんだと思うんですけども、後で少しお話ししますが、親ごさんはなかなかつらい思いをされながら子育てをしているので、駄目だから療育ではなくて、いい方法を見つけるために、少しポジティブにお話をしていただければと思います。

この子に合わせた保育、それから、この子に合わせた教育、この子に合わせた関わり方をする、この子の発達がもう少し伸びるかもしれない。

横須賀市の場合は、正直に「園が困っているから」と言ってもらって構いません」と言っています。これは、受け手の療育機関によっては、「いや、こんなことを言われても困る」というところがあるので、これはケース・バイ・ケースですけども、我々は、来た人を頑張つて発達支援のレールに乗せるのは、1つの専門スキルだと思っ

ているので、親ごさんは全然困っていない。「何か園が『困っている』と言って、いろいろ言われてしまいました。園長先生とか、いろいろな先生が出てきて言われてしまつて、『行け』と言われたんですけども」と、すごく怖い顔をして親ごさんがいらっしゃるんですね。

お子さんが来てみれば、確かに、うん、そうだよなというお子さんと、それを一生懸命、「こういうことをやると伸びていくよ。発達するよ。成長するよ」と言って療育に参加してもらおうのは、我々受け手の腕次第なんです。

なので、やはり親ごさんはどうしても療育センターというところ、「療育センターなんか行きたくない」「なんか行きたくない」というのが社会的障壁なのは分かりますね。それは分かれます。だけれども、来てもらって子供が伸びれば、最終的には、来るときは嫌だったけれども、1年、2年たつて、「来てよかったです」と言われると、我々もよかったですと思うので、上手につなげてください。

親ごさんの抵抗感とか、拒否感とか、最近では、むしろ逆に積極的に療育センターに行きたいという親ごさん、凸凹だけ見て、全然困っていないんですけれども、この子は凸凹があるし、うちの旦那もそうだしというのはよくあるので、本当にグレーゾー

ンの子が増えているんですけども、それはそれとして支援はしますけれども、実際に困っているお子さん、お母さん、そして、先生たちへのサポートというのは必須だろうとは思っています。

ただ、すごく期待されているのは分かっていますが、何でもかんでも質問に来ることがあるんですね。食事のこととか、姿勢のこととか、プールに入れていいですかとか、今度、遠足に行くんですけども、何か配慮点がありますかとか、いやいや、ちょっとそれぐらい考えてほしいなと思うんです。

なので、考えていただいて、園としては、この子はこういうふうに見立てをして、この子の発達や特性について、園としてはこういう見立てをして、こういう方針でやりたいと思っているんですけども、それで合っているでしょうかと問われれば、そこまできちんと見立てと方針を出していただければ、大体合っているんです。なので、丸投げしないで、少し園でも考えていただけて、これでいいかどうかと、ぜひ聞いていただきたいなと思っています。

そして、療育センターは通過点です。一生付き合うものではありませんので、それを踏まえて、ただ、どうしても身体障害や医療的ケアなど、発達障害だけではないお子さんで、通過点では済まないお子さんは確かにいらっしゃいます。その場合は、もちろん必要なサポートは必ずとしていきますし、成人の施設や病院にもおつなぎをしますけれども、基本的には児童発達支援センター、療育センターは、卒業してもらうための場所だと私は思っていますので、そこは何となくそう思っているだけだとうれいかな。いつまでもたつても療育しないと、その子が発達、成長しないというのは、重症の子は別として、それでもない子は、やはり卒業してもらうことが1つのゴールだと思います。

それから、スライド16の6番目の「押したり引いたり」といきなり出てきましたけれども、これは、幼稚園、保育園の先生たちにお話すると、「なかなか療育センターに行ってくれないんです。どうしたらいいですか」と言って、お子さんのことを聞いて、個人情報があるから、あまり生々しくは聞かせませんけれども、少し聞いてみると、確かになと思うんですが、1回でつながるお母さんと、10回言わないとつながらないお母さんと、30回言わないとつながらないお母さんと、そのケースのポイント数があるわけです。1回言つながらないからといって、諦めないでください。そのお母さん、ご家族が、何ポイントたまったら、ポイントがたまらないとつながらない親はいっぱいいるわけです。

なので、うちのセンターの職員の誰かが「ポイント制だね」と言って、勝手に僕は使っているんですけども、1ポイントでつながる方もいれば、10ポイントでつながる人もいれば、30ポイント必要な人もいれば、それはもうケース・バイ・ケースです。



## 幼児期の困りごと

### (1)言葉の遅れ

☞伝わるのが大事「質より量」

### (2)動きの多さ

☞危険回避・原因探求・有効活用

### (3)感覚過敏

☞意識する・無理強いせず徐々に慣らす

### (4)集団活動・集団適応

☞大人の適切なアシスト・介入が不可欠

17

30ポイント必要なケースの場合は、なかなか先生たちはご苦労されますし、小学校に入ってからポイントがまだ足りなかったりするわけですが、昔、幼稚園、保育園で言われたということは、お母さんたちは絶対覚えているんです。言われて拒否したということは、本当は大丈夫なのかなと思っっているんですね。それで、小学校の4年生ぐらいになって、学校に行けなくなって、いろいろ検査をしてみたら、こちらとしては、もう少し早めにとと思うんですけども、それは親ごさんなりの葛藤があつて、やっと4年生になって、学校に行けなくなつてつなげたことがあるわけです。

この間も、「幼稚園、保育園では言われなかったの」と聞いたら、「いや、言われていたんですけども、まさかうちの子がと思つて、何度も言われたんですけども、1年生になったら意外と大丈夫だったので、ああ、幼稚園、保育園の先生のやり方が悪かったのかなと思つたんだけども、やっぱり今から振り返ってみれば、幼稚園、保育園の先生が『療育センターに行け』と言っていたのは正しかったんだと思うので、あのとき行っていればよかったです」と、絶対覚えていきますので、幼稚園、保育園で「大丈夫だ」と言われた。いや、大丈夫ではないだろうと思うんです。別のお母さんで、「何も言われませんでした」と言うのは、何も言われないうことは大丈夫だということになつてしまふので、そうすると、なかなか後からつながらなくなるので、嫌がられるかもしれないけれども、言つてもなかなかつながらないかもしれないけれども、療育センターとか、そういう発達のも、専門機関に行くといいかないというのは、効果がなくても、ぜひ言い続けてほしいなと思います。

さて、具体的な困り事に関しては、多分、後でもお話があると思いますし、質疑応答でも取り上げると思いますけれども、幼児期は大体この4つかなと。言葉の遅れ、動きの多さ、感覚過敏、それから、集団適応ですね。

言葉の遅れというのは、何でも言葉、言葉と、特におしゃべりが遅い、なかなかしゃべってくれないお子さんの場合は皆さん言うんですけども、しゃべれば言葉さえ出ればみたいな、しゃべればもう全部解決みたいな、でも、そうではな

くて、言葉というのは、コミュニケーションの手段の一部であつて、その子のやりたいことが伝わればいいんです。やりたいことや、意思、トイレに行きたいのか、おなかがいっているのか、遊びたいのか、嫌なのか、痛いのか。それが、もちろん言葉で伝えられれば一番いいですけども、そうではなくて、言葉以外の手段、身振り手振りでも、何か伝えようとしている。先生たちは、保育のプロなので、しゃべらなくても、この子はトイレのかな、おむつのかな、痛いのかな、眠いのかなというのは酌み取つてあげられると思うんです。

そのときに、「言葉で言わないと分からないじゃない」というのは、あまり言わないでほしいなと思います。まずは、伝わるのが大事。この先生に「うにゃあ」と言えば、あつ、この先生はちゃんと分かってくれるんだという、分かつてもらつた感じというのはすごく大事だろうと思います。

なので、「質より量」と書いたのは、正確なコミュニケーションというよりも、とにかくいっぱい言葉が飛んでくるみたいな、小さいうちはいっぱい言葉が飛んでくるみたいな、そういうことが大事かなと思います。

動きの多さは、本当に危なくないようにするところが大事だろうと思いますし、感覚過敏は、今日は脱線してしまつたので、ゆっくりお話できませんけれども、実は、感覚過敏のある、なしというのは、子供たちに限りませんが、発達系の人の生活を物すごく左右します。感覚過敏というのは、こちらがそう思つてアセスメントをしないと、聞いていかないと、なかなか分からなかつたりしますので、いろいろな五感の感覚過敏については、ぜひ意識をして、基本的には乳幼児期は無理強いせず徐々に慣らすというのが原則だと思いますけれども、感覚過敏についても、少し頭の片隅に置いていただければと思います。

集団活動・集団適応は、大人の適切なアシスト、介入が不可欠で、これがまた人員人手の問題とリンクするので、言うは易し、行ふは難しだと思いますけれども、やはり子供たちだけではなくて、大人のアシストは必要だろうと思います。

学校生活になると、もっとハードルが上がるんですね。学習面、友達関係、それから、日常生活。それで、発達に課題のあるお子さんというのはキャパオーバーになつてしまいますね。

しかも、人間として自我が確立していきますし、自立もしていきますし、もう本当に学校生活のほうに、さらにハードルは高いんです。だから、学校に入るまでにこれをやらなければいけないのは、親ごさんも先生たちも分かるんですけども、発達がゆっくりだったり、課題がいっぱいあるお子さんの場合は、学校に入つても支援が継続と。だから、必ずしも学校に入るまでと焦らなくてもいいのかなと思います。



## コミュニケーションのコツ

- (1) 合わせる：ノンバーバルが大事
- (2) くみとる：生理・行動・言葉
- (3) つたえる：言葉遣いの注意
  - ・シンプルに一つずつ
  - ・一回聴いて分かるように
  - ・具体的に：曖昧や遠回しは駄目
  - ・して欲しい行動を伝える

19

## 学校生活の困りごと

- (1) 学習
    - ☞ ハードル設定を間違えない!
  - (2) 友人関係
    - ☞ 大人が目を配っておく
  - (3) 日常生活でもすべきことが多数
    - ☞ キャパオーバーに注意
- ＋自我の確立や自立も阻害しない

レベル・学習手段・集中時間

18

さっきのところで言えばよかったんですが、コミュニケーションは、まずはノンバーバルといって、この子は何が言いたいんだろうという雰囲気ですね。

あとは、この先生なら、少し何か言えるかなみたいな、相手によってメッセージが出せる、出せないというのがあります。だから、こちらが上から目線とか、こちらのペースでわあわあ言うのではなくて、少し見てあげる。その少し見るという非言語的な関わりというのはすごく大事です。

それと、子供の生理現象。顔色、動きや言葉など、こちらが酌み取ってあげる、理解してあげようとするのはすごく大事です。英語などをしゃべるときも、僕は

本当に英語が下手つびなんですけれども、下手つびな英語なりに聞いてくれようとする人にはしゃべろうと思いますけれども、一々駄目出しされたり、「分からない」とか言われてしまうと、もう言いたくなくなってしまうので、酌み取ろうとしてあげる気持ちがあっても大事だと思います。

それから、これはむしろ親ごさん向けですけども、伝えるときはシンプルに1つずつ、1回聞いて分かるように、具体的に、それから、してほしい行動を伝える。廊下を走っているお子さんに、「走るんじゃないよ」と言ったら、匍匐前進を始めた子がいて、「だって『走るな』と言うから匍匐前進したんだけど」と。「歩きます」と言えればいいんです。

「何々してはいけません」と言われて、

## パニック対応のコツ

- (1) 本人の意志を汲み取る
    - ☞ どうしたいのか?
  - (2) 感覚特性を考慮に入れる
    - ☞ 何が抵触しているのか?
  - (3) 行動の分析 ☞ きっかけと結末
  - (4) フラッシュバックへの対処も
- 原因除去・気分転換・ひたすら待つ

21

## 困る行動・問題行動

ではなく「対処行動」

社会的に許容される

より適切な行動に置き換える

ただし下手な

20

では、何をしたらいいかというの、想像力のある子はできるんです。「走りません」と言われて匍匐前進した子は、何で、何が悪いんだとなるわけです。なので、してほしい行動をストレートに伝えるというのも大事です。

それから、問題行動と言われるのは、周りから見れば問題行動なんですけれども、子供にすれば、他害や多動、自傷、リストカットなどというのは、その子なりに意味があるわけです。俗に言う問題行動がずっと続いているということは、その子にとっては何かしらの意味があるわけです。それをやると親が注目してくれるだったり、先生が構ってくれるだったり、それはこちらから見れば、いや、そんなことをやって駄目だよと思うんですけども、ずっと続いている行動は、その行動の中に何か意味がある。パニックなどはそうですね。どうしたらいいのか、いつもパニックを起こす、かんしゃくを起こす、「ぎゃー」と言う。どうしたいのか考えてあげる、酌み取るということが大事です。

それから、感覚特性の話はさっきしました。何かが抵触している場合があります。そして、今日、詳しい話はできませんけれども、何か問題行動を起こしたときは、きっかけは何だったのか。それから、結末が、その行動をやることによって、どういうメリットがあるのか、デメリットがあるのかという分析は必ず必要です。それから、フラッシュバックでパニック



## 保護者として

自分（達）にできる子育てをする  
パートナーへの期待はほどほどに  
子どもへの期待もほどほどに  
自分への（ささやかな）ご褒美も

22

## 自分と家族の凸凹を振り返る

凸凹は遺伝する

## 自分と家族の育ちを振り返る

されて嫌だったことはしない！  
子どもにヤキモチを焼かない

23

## 支援者として

自分達にできる支援をする  
結果への期待はほどほどに  
子どもと家族への期待もほどほどに  
自分への（ささやかな）ご褒美も

24

## 心身の健康を保つには

疲れたら休む（ぼんやりは大事）  
自分にとり心地よい人・物と接する  
愚痴を言える相手を持つ  
自己否定をしないことを決心する  
（〇〇〇〇の自分が好き！）  
心の持ちようを転換しようと努める

宮本輝「月光の東」より

25

クを起こしている場合は、もうこれは分かりませぬ。昔あったことをふっと思い出して、わあとなつてゐるわけですから、その場合はひたすら待つしかありません。パニック対応のときは、原因がないかどうか考えてあげて、原因がどうしようもないときは少し空気を替えて待つということ。この3つかなと思います。今日、もうあと少しで終わりますけれども、お母さんたちにお話をするときは、「無理しないでいいよ」と、一言で言えばそうです。ただ、もちろん全然無理しない、ネグレクト系の親もいるので、ケース・バイ・ケースですけれども、できる子育てをしてください。あとは手伝いますって。それから、あまり大きな声では言えませぬけれども、パートナーにすごく期待するとかっかりしてしまつたら、期待も程々が一番いいんだよと。全然期待しないのもいけないし、でも、期待し過ぎるとがっかりしてしまつたら、期待というのは程々がいいんだよと。これは、時々学校や園への期待も程々にと言つたりすることもないわけではないですけれども。発達障害のある子育てはすごく大変なので、自分へのささやかなご褒美は忘れないで。今日は具体例を言いませんけれども、僕はいつも、コンビニスイーツの話をして、いろいろなコンビニの300円とか400円のおいしいスイーツがあるので、少しそういうものを食べて、自分へのご褒美を忘れないで、大変だよねという話をいつもしています。

それから、凸凹や育ちを少し振り返るといいねというのは、さつき途中で脱線してお話をしました。発達障害は、必ずしも絶対遺伝することではないですけれども、凸凹はある程度は遺伝すると思ひますし、それから、自分の育ってきた環境というのは、場合によつては同じことを子供にやつてしまつたりもしますので、自分がされて嫌だったことはしないでねとお伝えをしたり、「私が子供の頃は」と言い出すから、いや、時代が違うから、もううちの子が羨ましいですなんてやきもちやかないでいいよという話はしています。それから、支援者として、我々も何かうまくいかないとうわつとなつてしまふんですけれども、先生たちもそうです。自分たちができること、先生たちの関わりで積み残しがあれば、バトンタッチをしていただければいいと思います。それから、我々の業界でも、学校でもそうですけれども、熱心な先生ほど燃え尽きてしまふんです。だから、自分が燃え尽きてしまつたらなかなか難しいです。程々、ちよつどよいところでやつていきましょう。それで、ご褒美も忘れないでという話です。あと2枚ですね。すみません。少し時間配分を誤りましたけれども、これは、僕の大好きな宮本輝さんという小説家の小説の中に精神科の先生が出てきて、心身の健康を保つ方法ということで、これはとってもいいなと思つて、最近、使つてゐるんです。



親ごさんにいつもお話をしています。支援者にも言えることです。疲れたら休む。ほんやりは大事です。

それから、自分にとって心地よい人や物と接する。僕は電車です。鉄ちゃんですから、電車なんですけれども、やはり自分の心身を保つ、それから、愚痴を言える相手を持つというのは、これ、実はすごく大事で、子供もおうちに帰ってきて、「今日、学校でこんなことがあってね、こんなことがあってね、嫌だったんだよ」、それに対して、「あなたが悪いからでしょう」と親ごさんは言わないで、聞いてあげてと言いたくなるんです。「だって、あなたがそんなことをやるから怒られちゃうんでしょう」もバツ。愚痴を言うということは、ストレス発散のすごくいい方法なんです。

それから、大きくなってきて、「もう私、駄目なんだ」と自己否定しないことを決心しないと、保育士をやっている自分が好きとか、いろいろ大変だけれども、発達支援をやっている自分が好きとか、どうしてもネガティブになりがち人というのは、それが癖になっていますので、自己否定をしないというのは決心してやるものだと書いてあって、そうだなと思います。

それから、気分転換も、努力して、意識して、決心して気分転換をすること、これが最後です。支援のゴールですけれども、もう大体お話をしました。自分なりに人生に対処できる。支援が最小限になることが目標だと思います。

## ゴール

支援は最小限

- (1) 自分なりに人生に対処できる
- (2) 自立とは
  - × 全て自分で出来る
  - 困った時にSOSを出せる
- (3) それぞれの社会参加や幸せな時間

26

ただ、自立というのは、全部が自分でできることではなくて、困ったときにSOSを出せること。SOSを出す能力はすごく大事なことです。僕も困ったら岡生にメールしたりして、どうしたらいいですかと相談することはたまにあるんですけれども、相談できる、SOSを出すという能力がすごく大事です。そして、最終的には、それぞれの社会参加や幸せな時間。

凸凹というのは、捨てればゴミ、活かせば資源。

これは子供のことでなくて凸凹のことです。凸凹は、適材適所が一番いいわ

みんな違ってそれで良い

“適材適所”

“捨てればゴミ活かせば資源”

27



特性を活かした人々 28

けで、それをほいっとしてしまえばゴミですけれども、活かせば資源ということで、凸凹を生かして世界を変えた人たちを8人。ここまでにならなくてもいいですけれども、この右上の、僕はあの人に興味がないので名前をいつも忘れてしまっただけでも、右上の人以外は、自分、誰一人いなかったとしたら世界は変わっていたと思います。歴史が変わっていたと思います。

アイシユタインなどは、いい方向に変わったかどうかは別ですけれども、やはりこの人たちは、やっぱり凸凹ちゃんです。この人たちがいることで世界が変わった。特性を活かしたということ、ここまでにならないにしても、凸凹や特性はぜひ活かしてほしいなと思います。

マシンガントークでしたが、最後に本のご紹介です。ご興味のある方は少し読んでいただければと思います。ご清聴ありがとうございます。(拍手)



発達障害支援のコツ  
広瀬宏之

発達障害支援の実際  
広瀬宏之

100問・100答  
発達障害のある子育て  
相談のコツ  
広瀬宏之

子育てのヒント  
「てんこ盛り」

発達障害のある子育て  
家族で支え  
広瀬宏之

地域支援で医師にできること  
発達障害診療の手引き

子育てのヒント「てんこ盛り」  
七カ月の長子が寝を合わせさせてくれない……九歳の娘が「どうして人は死ぬの?」……高校生の子がスマホゲーム依存……。大人世帯の悩みに、現場一筋の小児科医が、家庭の隅々まで丁寧に答えます。お母さんから専門医まで、子どもの未来をつくる子育てのヒント。

29

広瀬宏之

発達障害  
グレーゾーン  
の子の育て方がわかる本

回りに  
向き合う  
育て方のヒント  
が満載!

声かけ ほめ方 環境づくり 就学準備 学習支援

ご静聴ありがとうございました

30

# 発達や行動が気になる子どもと保護者への支援

埼玉学園大学人間学部心理学科 教授  
佐々木美恵

今日、私からは、子供の支援と保護者の支援の2本柱でお話をしたいと思います。プラス、保育者の支援という観点からも少しご用意しています。今日は、私も張り切って、たくさんお話する内容を用意してしまつたので、時間、55分をオーバーする予定なんですけれども、お許しください。勝手にオーバーするわけではありませんので、お許しください。



今日、事前質問をあらかじめ下さつた先生方がいるかと思いますが、そのお答えするよう内容も幾つか混ざっております。では、始めていきます。

今日のお話ですけれども、このように子供支援と、保護者支援と、保育者支援というところで、

## 今日の話の主な軸

- ・保育者の役割
- ・早期支援の促進と難しさ
- ・子どもの発達上の課題への気づき
- ・園でのかかわりの工夫
- ・保護者を支援するために

2

## 発達支援をめぐる私の略歴

- 公認心理師、臨床心理士
- 乳幼児健診(1歳半健診, 2歳経過相談, 事後フォロー親子教室, 3歳健診)
- 児童相談所(子ども支援, 療育手帳の更新)
- 心理相談室での子どもへの療育的サポート
- 幼稚園訪問での保育者支援
- (現在) 私立幼稚園スクールカウンセラー
  - 子ども支援(観察, 見立て, かかわりや環境調整の工夫検討)
  - 保護者支援(早期の気づき支援と継続的サポート, 就学に向けての準備)
  - 保育者との協働(子ども支援・保護者の検討, 保護者と園をつなぐ)
- (現在) 埼玉県A市就学支援委員

その他に、通常の心理面接のなかで子どもや保護者への支援を行っている。

3

順番にお話をしたいかと思っております。私の略歴なんですけれども、私は心理士として、子供と保護者を支援する、そんな実践を積んできています。それで、保育現場との関わりが年々すごく深まってきたいて、いろいろな保育園、幼稚園に出入りさせ

てもらって、いろいろな先生方、園長先生と交流を深めているところです。

今は、私立幼稚園でスクールカウンセラーをしまして、幼稚園スクールカウンセラーは、この10年ぐらい、ある1つの園に通って、スクールカウンセリング、子供の支援、保護者支援と、あと先生方と一緒に考えていくという仕事をしています。そのほか、埼玉県のある市の就学支援委員も務めております。

まず、保育者の役割というところなんですけれども、発達が気になる子供の気づきルートは、主にこの5つのルートがあるかなと思います。

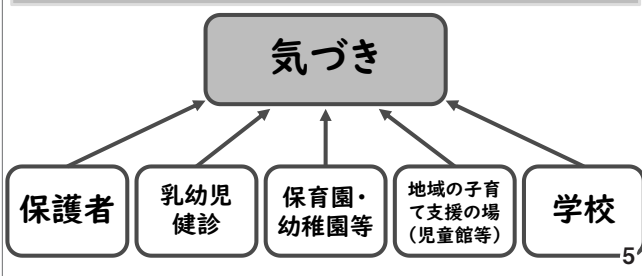
まず、保護者ですけれども、最近はいろいろなインターネットの情報などもありますので、自ら気づく方も増えてきたかなという印象はありますが、やはりまだまだ、決して多くはないかなと思います。

乳幼児健診はとても良いシステムで、網羅的なスクリーニングではあるんですが、私も乳幼児健診の心理職として関わっていた時期もあるんですけども、健診の中に身を置いていると、それほど見逃しはないという感じを持っているんですが、今、私が保育現場のほうから見ていると、何か一定数の漏れがあるなど感じるのが不思議なところで、立場が変わると随分見え方が違うなと思っております。

そのほか、保育園、幼稚園、そして、地域の子育て支援の場や学校は、日常の中で気づくという現場です。恐らく、今日の多くの先生方が、ここに関わっていらつしゃつ

保育者の役割

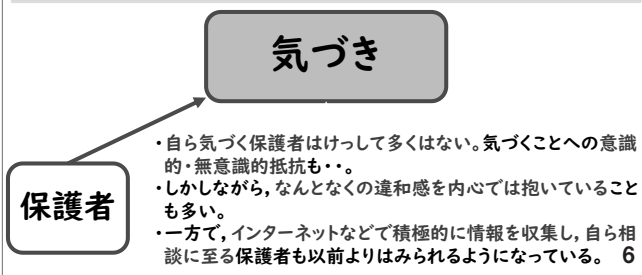
### 発達が気になる子どもの主な気づきルート



5

保育者の役割

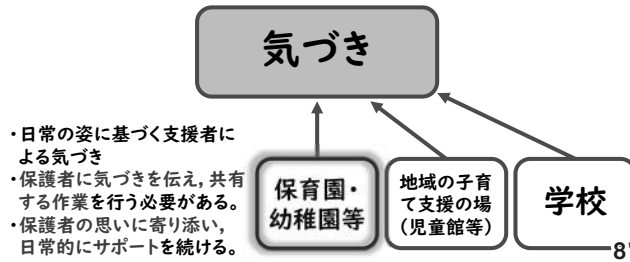
### 発達が気になる子どもの主な気づきルート



6

て、つまり、先生方が気づいて、それを伝えていくという作業がここに含まれていて、そこに難しさがある領域かなと思います。では、なぜ早期支援が重要かということですが、早期というのは未就学段階です。幼稚園で言うのと、幼稚園入園前

### 発達が気になる子どもの主な気づきルート



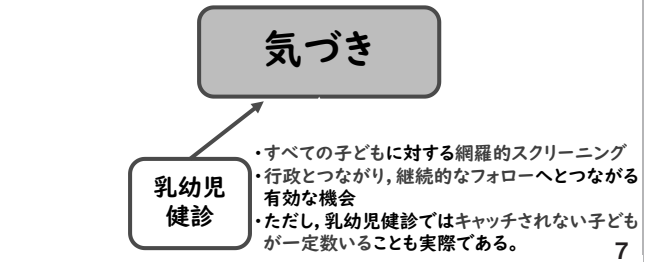
- ・日常の姿に基づく支援者による気づき
- ・保護者に気づきを伝え、共有する作業を行う必要がある。
- ・保護者の思いに寄り添い、日常的にサポートを続ける。

### 早期支援者としての保育者の役割

- ✓ 子どもの発達上の課題への気づき  
初めて気づき、保護者に伝える役割
  - ✓ 子どもの育ちの支援  
かかわりの工夫、環境調整、心の育ちへの配慮
  - ✓ 保護者の支援  
不安や困り感への寄り添い、かかわり方の工夫の共有、子どもの育ちを見つめていく伴走者
  - ✓ 就学に向けての支援と橋渡し  
不安や迷いへの寄り添い、現実的な情報提供、育ちのまとめと小学校への橋渡し
- 10

上の問題や、適応上の問題が出てから支援するというのは、実は、もうつまずいてからの支援という感じなんです。早期支援というのは、発想としては、大きくつまずく前の支援なんだという観点になります。そして、保護者を早くからサポートする。つ

### 発達が気になる子どもの主な気づきルート



### 早期支援の重要性

- 発達上の課題をもつ子どもをよりよく支援するためには、なるべく未就学段階の早期に気づき、支援につなげることが重要
- ・子ども自身の育ちのサポート 大きくつまずく前の未然の支援  
—より早くから適応や自立を支えることができる。  
—それによって、二次的な心理的問題の緩和につながる。
  - ・保護者を早くからサポート  
—困り感をもつ保護者を早くから支えることができる。  
—保護者による子ども理解を早くから支え、促すことができる。g

らいい感じの感もありません。2つの意味で重要だと思います。子供自身の育ちをサポートする。早くから適応や自立を支える。そして、二次的な心理的問題を防ぐ。つまり、小学校に入ってから、いろいろな学習上の問題や、適応上の問題が出てから支援するというのは、実は、もうつまずいてからの支援という感じなんです。早期支援というのは、発想としては、大きくつまずく前の支援なんだという観点になります。そして、保護者を早くからサポートする。つ

### 早期支援・早期療育の促進と広がり

- 2012年、児童福祉法改正  
—障害のある未就学児を対象とした一元的な福祉サービスとして、個別あるいは集団療育を行う児童発達支援が位置づけられた。
  - 児童発達支援を担う児童発達支援センターや児童発達支援事業所の展開と充実化  
—事業所数の増加とともに地域での療育の受け皿は広がってきている。
- 12

### 児童発達支援の利用児童数の増加

令和元年度の児童発達支援の利用児童数は、平成26年度比で約3.3倍  
(障害児通所支援の在り方に関する検討会、2021)

右肩上がりの増加を示している。



3倍ということなんです。今、もう令和6年まで来ていますので、もっと増えていくのではなかなという気がします。なので、年々、こういった療育を使う子供たちは増えてきているんだらうと思います。

まり、保護者を早くから支えていって、心理的負担をなるべく支えていくんだというところ、保護者が子供を理解していく、そのプロセスを早くから始めて、深くしていくことができると思います。

保育者は早期支援者に当たるわけですけれども、そのポイントで、まず、初めて気づくという役割を担うことが多いかと思っています。初めて気づいて、伝える役割。そして、育ちの支援ですね。関わりを工夫して、環境調整をして、しかも、心の育ちまで考えていく。そして、一方では保護者を支援する。寄り添ったり、こんな工夫をしていますよというところを共有したり、保護者と一緒に子供の育ちを見ていく伴走者でもありますね。そして、最終的には、就学に向けて、小学校への橋渡しをしていくという役割も担っているかと思っています。仕事がとて多いですね。

では、早期支援は重要なんだけれども、その難しさについて、少し触れたいと思います。2012年、今から10年ぐらい前に児童福祉法の改正で、児童発達支援というものが位置づけられて、もう格段に地域での療育の受皿が増えてきましたよね。発達支援センターさんの機能も高まったし、各事業所が、いろいろな企業が参入して、いろいろなところが、いろいろなところで療育を受けられるように、今はなっているかなと思います。

実際の数値として、令和元年度の児童発達支援の利用児童数は、平成26年度比で3.3倍ということなんです。今、もう令和6年まで来ていますので、もっと増えていくのではなかなという気がします。なので、年々、こういった療育を使う子供たちは増えてきているんだらうと思います。



早期支援の促進と難しさ

### 保護者に気づきを伝えることの困難

保育士を対象とした調査で、  
気になる子の発生割合は10.8%  
→そのうち39.5%の保護者に発達上の課題の伝達  
(佐藤・田口・山口・大森, 2019)

6割程度の保護者との間で課題の伝達と共有が  
なされていないこととなる。

保護者に気づきを伝えることの難しさが  
その一因になっている? 15

早期支援の促進と難しさ

### 伝達後の保護者の反応への不安

- 受け入れられなさ
- 怒りなどのネガティブな感情反応
- 関係の悪化
- 保護者への問題伝達の困難性が保育者のバーンアウトと関連(木曾, 2016)

気になる子や保護者への支援を行う自信  
→保育者による保護者への発達上の課題の伝達  
[促進] (佐藤ほか, 2019) 16

気づくんだけれども、そのうちの6割には、実は伝えていないんだという調査データなんです。先生方のご実感としては、いかがでしょうか。そんな感じはありますか。1割ぐらい気づくんだけれども、お話をできたのは4割ぐらいかななんて感じはあ

### 気づきの観点

身体・運動面	ことば
情緒面	行動面
人とのかかわり	集団場面
あそび	

18

### 身体・運動面

- 歩き始めがゆっくり、あるいは早い
- 手先の不器用さ: 着脱、箸づかい、制作、運筆
- からだ全体を使った動きの苦手さ: なわとび、ケンケン、動きの不器用さ
- 姿勢維持の苦手さ: だらんとしてしまう、横になってしまう

体幹の弱さ、注意集中の苦手さ、場面理解の苦手さ

(参考) 健やか親子推進本部 就学前の子どもの育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

19

りします。ことばはとも代表的に現れると思いますけれども、やはり言葉がゆっくりだったり、繰り返して言うようなおうち暮らしがあったり、言葉遣いが独特であったり、独り言が多かったり、むしろ多弁、おしゃべりであったりということ

早期支援の促進と難しさ

### 未就学段階での潜在的な支援ニーズ

- 令和元年度には5歳児の3.7%が障害児通所サービスを利用  
(障害児通所支援の在り方に関する検討会, 2021)
- 小学校・中学校で通常の学級に在籍する児童生徒のうち、「学習面又は行動面で著しい困難を示す」子どもの割合は8.8%  
(文部科学省, 2022)

顕在化していない支援ニーズがある可能性の指摘  
(障害児通所支援の在り方に関する検討会, 2021)

発達上の課題をもっているものの、未就学段階で適切な支援に至っていない子どもたちの存在が少なからず考えられる。 14

一方で、こんなお話もあります。令和元年度には、5歳児の3.7%が障がい児通所サービスを利用しているということなんです。一方で、2022年の文科省の統計データで、8.8%ということもありました。ここに5%の開きがあるということで、顕在化していない支援ニーズがあるのではないかとこの指摘もあります。つまり、未就学段階で、まだ支援に至っていない子供たちが、やはり一定数いるんだろということも裏づけられるかなと思います。そして、保育士を対象とした調査で、気になる子の発生割合が10.8%。先ほど、広瀬先生のお話でも1割というお話がありましたけれども、まさにという感じですよ。10%ぐらいの子供に関して、何か気になるなという感覚を持っていらっしゃるわけです。そのうち39.5%の保護者に、発達上の課題を伝えていくということなんです。つまり、10%ぐらい

りまずでしょうか。では、何が難しいのかと言うと、やはり受け入れられなさ、ネガティブな感情反応、関係が悪化するのではないかとといった、問題を伝えることの難しさが、実は、バーンアウト、燃え尽きにもつながるんだという研究データもあります。一方で、支援を行う自信があると、発達上の課題を伝えられるんだという促進する効果もある。それは当然なんですけれども、子供たちを支援できる、保護者を支援できるという自信があることで伝えられるんだという研究結果もあります。つまり、子供に対して支援ができるし、保護者に対しても関わられるという、保育者側の自信というか、効力感というものがとても大事なんだと感じますね。では、発達上の課題への気づきなんですけれども、この部分に関しては、先生方、実は、たくさん研修の機会などがあるのではないかなと思いますので、この辺りはほんの若干駆け足で行こうかなと思っています。こんなところがありますよねというところを共有しながら、あっ、あの子はそうだなとか、何とかちゃん、何とか君と、少し後半の話に向けてイメージアップになればいいかなと思います。身体・運動面では、歩き始めがゆっくりだったり、あるいは早かったり、手先が不器用だったり、体全体を使った動きが苦手だったり、姿勢維持の苦手さというのもあったりします。





## 情緒面

- 感情の不安定さ: 対処できない・思うようにいかない状況でわーっ  
と混乱を示す, 切り替えが困難
- 感情表出の激しさ: 爆発したように泣いたり怒ったりする
- 喜怒哀楽の感情のメリハリが見えにくい:  
ぼんやりした感じ, 平板な表情 (にこにこしていることも),  
共有できる自然な情緒の流れが見えにくい

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

21

## 望ましい行動への積極的応答

望ましい行動 (≡増えてほしい行動) に対しては, 積極的に  
応答する。 ・ほめるなどのポジティブな応答  
・行動の直後にすぐさま返すことがベター

例) ・言葉での応答:  
「がんばったね」「すごい!」「ありがとう」  
「よく我慢できたね!」  
・言葉以外での応答:  
笑顔でうなずく, 拍手, ガッツポーズ, OKマーク

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

23

## 問題を子どもの外に取り出して共有する

問題 (かんしゃく, イライラ, 手が出る, 一番になりたい! など) を子  
どもの外に取り出す。 絵カードや描いた絵を用いると, なおよいかも  
一たとえば, 怒りんぼちゃん, パチンくん, いちばんくんなど, 名前を  
つけて子どもと共有する。 子ども自身を否定しないかわり

例) Aちゃんのなかに「怒りんぼちゃん」がいて, たまに「こんには」  
って出てくるよね。そうすると, Aちゃんもお友達ちも, みんながにこ  
にこできなくなるよね。  
「怒りんぼちゃんが落ち着きますように」  
「どうしたら怒りんぼちゃんがにこにこしていただけるかな」

25

中, こんなりいるなところ, 少しくもくと浮かんできただしう  
今日, だーつ子供たちの姿を追ってききましたけれども, 何か先生方の  
特定遊びを好む, 遊びが次から次へと移ろいやすいということもあるか  
と思います。  
そして, 遊びです。一人遊びの多さ, 同年齢のお友達と遊ぶことが苦手,  
特定の遊びを好む, 遊びが次から次へと移ろいやすいということもあるか  
と思います。  
今日, だーつ子供たちの姿を追ってききましたけれども, 何か先生方の

## ことば

- 始語や語彙の増え方がゆっくり
- 言われた言葉を繰り返して言う, オウム返し
- 言葉遣いの独特さ: 聞いた言葉をそのまま用いている, 好きなフレーズの  
繰り返し, 自然な抑揚が乏しい
- 独り言の多さ: 思ったことを口にして, 見聞きしたものにへの反応,  
他者視線をもちにくい, 心の整理
- 多弁: キャッチボールが難しく一方通行になりやすい, 思ったことを

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

20

## 気持ちを落ち着ける場所を作る

感情が高ぶったときや, 不安や不快になったときのクールダウ  
ンの場所 (なるべく刺激の少ない場所) を作る。  
段ボールやパーティションで区切った一角でも可

ただし・  
・落ち着いたら, そこから出てくる一時的避難所として活用する。  
・保育者と子どもで共有できるようにネーミング  
をすると, なおよい。例) ほっとる一む, おやすみたいむ

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

22

## (応用) 望ましくない行動を減らすための積極的応答

減ってほしい行動 (いわゆる問題行動) 以外の望ましい行動に積極  
的に応答することによって, 間接的に問題行動を減らしていくアプ  
ローチもある。

例) (問題行動) お友達を叩いてしまう  
(対応) 叩くような出来事が起こる前に,  
「今日はお友達と仲良くできていて, みんなうれしいね!」  
と積極的に伝える。  
※叩かないでいること以外の行動に積極的に応答する。

24

があります。  
あと, 情緒面, 感情の不安定さ, いわゆるパニックのようなことが起こつ  
たり, 感情表出がすごく激しいということもあつたりします。  
一方で, 感情のめり張りが見えにくいということも, 実はあつたりしま  
すね。  
行動面では, 立ち歩いたり, 飛び出したり, じっとしていることが苦手  
なんだというところとか, 新しい場面が苦手だったり, 予定の急な変更が  
苦手だったり, 特定なことへのこだわりがあつたりします。この資料の中  
で, こんなふうなボックスの中に入っているのは, こういうことが関係す  
るんですよというところを添えていますので, また, お時間があるときに  
目を通してみてください。  
行動面で, お片づけや, 登園時, 降園時の支度が苦手だったり, 特定の動  
きや行動を繰り返す, 感覚の過敏さ, 一方で鈍感さもあつたりするんです。そ  
ういった感覚をめぐると特有の在り方なども特徴としてあると思います。  
あとは, 対人的なものですけれども, 目が合いづらかったり, 関わりが  
持続しにくい。あと, 会話のキャッチボールが難しい。そして, 手や行動  
が出やすかったり, ちょうどよい距離感が分かりにくいということもある  
かなと思います。  
集団場面は, 先生方がよく姿を捉えていらつしゃるのかなと思うんですけ  
れども, みんなと一緒に先生に関心を向けることが難しいとか, みんなと一緒  
に取り組むことが難しい, ほかのお友達と別の行動をしていることがある。発  
達上の課題を持つ子供は, ほかのお友達と同じものを見て共有するという  
これは共同注意と言うんですけれども, これがなかなか難しいんですね。  
なので, ほかのお友達が先生を見てお話を聞いているから私も聞こうという感  
覚が, なかなか持ちづらいということになります。  
関連して, 全員に向けてお話をしたことが理解できていないことが多い  
かつたり, 集団に入ることが苦手, 集団から一人離れた行動をとりやすい  
ということもあると思います。  
そして, 遊びです。一人遊びの多さ, 同年齢のお友達と遊ぶことが苦手,  
特定の遊びを好む, 遊びが次から次へと移ろいやすいということもあるか  
と思います。  
今日, だーつ子供たちの姿を追ってききましたけれども, 何か先生方の



## 集団場面 II

- 全員に向けてお話ししたことが理解できていないことが多い
  - ・共同注意の問題
  - ・注意集中の維持の難しさ

- 集団に入ることが苦手
- 集団から一人離れた行動をとりやすい
  - ・集団の雑然とした刺激が苦手
  - ・他者への情緒的関心のもちにくさ

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

27

## 絵や写真などの視覚的な補助を用いて示す

子どもの理解と行動のしやすさが格段に高まる。  
注意をそこに引き寄せることもできる

- 例)
- ・スケジュール
  - ・いますること
  - ・物の置き場所や位置
  - ・言葉だけでなくジェスチャーでも伝える
  - ・左右や前後のマーク

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

30

## 集団場面 I

- お集まりで皆と一緒に保育者に関心を向けることの難しさ
- 一斉活動に皆と一緒に取り組むことの難しさ
- 他のお友達と別の行動をしていることがある

- ・他のお友達が注意や関心を向けていると一緒に注意を向けて共有することの難しさ(共同注意の問題)
- ・注意集中の維持の難しさ

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

26

## あそび

- 一人遊びの多さ
  - ・他者と同じ楽しみを共有することの少なさ
  - ・他者との情緒的やりとりへの関心の少なさ
- 同年齢のお友達と遊ぶことの苦手さ
  - 言語的やりとりや遊びの水準などが合いにくい

- 特定の遊びを好む
  - その子個人の限定的な興味・関心のあり方

- 遊びが次から次へと移りやすい
  - 注意の移ろいやすさ

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

28

か。イメージアツプするまでもなく、多分、困っていらつしやるから、今日、お越しなんだろうと思いますけれども、少し子供の姿に関して振り返った上で、お話を続けていきたいと思いま

では、どう関わりができるかということなんですけれども、少しまとめてみました。

これは、代表的な支援です。視覚的な補助を用いる。これは、やっていらつしやる園はすごく多いかなと思

うんですけれども、視覚的な素材というのは、これは本当に子供の理解、行動のしやすさが格段に高まるかな

## 具体的で簡潔なことばで伝える

- OK** 具体的で簡潔、そのままの意味で十分に伝わることば
- NG** あいまいであったり、ニュアンスを理解してもらうことが必要な伝え方
- 言葉はそのままの意味で理解されやすいため

- 例)
- ・「そこにお片付けてね」⇒「青い箱の中に入れてね」
  - ・「ちょっと待っていてね」
  - ⇒「先生が戻ってくるまで待っていてね」
  - ・「後で遊ぼうね」⇒「おやつを食べたら遊ぼうね」

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

31

と思います。もちろんそれを準備するのが、日頃の保育の中で大変かなと思うんですけども、それを準備してあげる環境構成をすると、格段に違うかなとは思いますが、また、今、これが大事なんだよと、素材があることで注意をそこに引き寄せることもできますよね。

何を示すかと言うと、スケジュールであったり、今すること、物の置き場所や位置、あとは、左右や前後のマークなど、こういったところを示してあげる。

あとは、目で見て分かるという部分では、お話をしながら、ジェスチャーをするといいかなどという気もしますね。帽子をかぶろうねとか、かばんを持とうねとか、言葉だけではなくて、ジェスチャーも添えるとすごく分かりやすいだろうと思います。

そして、具体的で簡潔な言葉で伝える。もうそれ以外の解釈がないという分かりやすい言葉遣いがとても大事ですよね。

例えば、「そこにお片付けてね」ではなくて、「青い箱の中に入れてね」とか、「ちょっと待っていてね」ではなくて、「先生が戻ってくるまで待っていてね」とか、「後で遊ぼうね」ではなくて、「おやつを食べたら遊ぼうね」とか、ちょっとした言葉を足すことなんですよけれども、私たちであれば、「そこに」と言われれば、ああ、あそこだなと分かるし、ほかの多くのお友達は分かるかもしれないんですけども、その子は分からないかもしれないので、具体的に伝えましょうということになりますね。こういった言葉遣いの分かりやすさ、具体性というのとても大切なことだと思います。

そして、気持ちを落ち着ける場所を作ることです。よくクールダウンと言いますが、やはり気持ち、感情がうわーっと高ぶるとか、何か不安になったり、不快になったりということがあると思うんですよ。そのときに、少し気持ちが落ち着けられるようなスポットがあるといいかなと思います。それは、特段のお部屋を用意する必要はなくて、段ボールとか、パーティションで区切ったような場所でもいいかなと思います。

ただし、そこにずーっといるんだということではなくて、落ち着いたら出てくるという避難所。一時的に避難して出てくるという活用の仕方です。ここで少し私が添えたのが、先生方と子供で共有できるようなネーミングをするというかなと思

## 望ましい行動への積極的応答

望ましい行動(≡増えてほしい行動)に対しては、積極的に応答する。

- ・ほめるなどのポジティブな応答
- ・行動の直後にすぐさま返すことがベター

例)・言葉での応答:

「がんばったね」「すごい!」「ありがとう」  
「よく我慢できたね!」

・言葉以外での応答:

笑顔でうなずく、拍手、ガッツポーズ、OKマーク

(参考)

健やか親子推進本部 就学前の子どもの育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.ro.jp)

33

これは応用編なんですけれども、積極的応答のバリエーションです。つまり、いわゆる問題行動というのは、減ってほしい行動なわけです。それに対してのアプローチの応用編として、それ以外の望ましい行動に積極的に応答していくという方法もあります。

例えば、例を挙げてみました。お友達をたたい

## 気持ちを落ち着ける場所を作る

感情が高ぶったときや、不安や不快になったときのクールダウンの場所(なるべく刺激の少ない場所)を作る。

段ボールやパーティションで区切った一角でも可

ただし・

・落ち着いたら、そこから出てくる一時的避難所として活用する。

・保育者と子どもでも共有できるようなネーミングをすると、なおよい。例) ほっとるーむ、おやすみたいむ

(参考)

健やか親子推進本部 就学前の子どもの育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.ro.jp)

32

ますね。言葉はすごく大事で、ネーミングはばかにできないんですよ。例えば、「ほっとるーむ」とか、「おやすみたいむ」とか、これは私が適当に言っているんですけども、「ほっとるーむでちよっとほっとして来ようね」と言うと、そんなイメージが湧きますよね。そんな感じで、子供と保育者で分かるような言葉で何かネーミングすると、なおいいかなと思います。

そして、先ほどのお話にもありましたが、望ましい行動というのは、つまり、増えてほしい行動なわけです。それに対しては、積極的に応答するといいいかなと思います。

積極的に応答するというのは、褒めるということなんですけれども、言葉で応答したり、言葉以外で応答しますね。「頑張ったね」、「すごいね」、「ありがとう」、「よく我慢できたね」など、いろいろなバリエーションがあるかなと思いますし、言葉以外でも、笑顔でうなずいたり、拍手をしたり、ガッツポーズをしたり、オーケーマークを出したりして伝えることです。つまり、ポジティブな反応を返しませう。その伝えるタイミングというのは、その行動の直後にすぐさま返すことが望ましいと考えられます。今の行動が大事だったんだなと子供が分かるように、今、この行動だよということが分かるように、すぐさま返すわけです。

これは応用編なんですけれども、積極的応答のバリエーションです。つまり、いわゆる問題行動というのは、減ってほしい行動なわけです。それに対してのアプローチの応用編として、それ以外の望ましい行動に積極的に応答していくという方法もあります。

例えば、例を挙げてみました。お友達をたたい

## 問題を子どもの外に取り出して共有する

問題(かんしゃく、イライラ、手が出る、一番になりたい!など)を子どもの外に取り出す。

絵カードや描いた絵を用いると、なおよいかも  
一たとえば、怒りんぼちゃん、パチンくん、いちばんくんなど、名前をつけて子どもと共有する。子ども自身を否定しないかわり

例) Aちゃんのなかに「怒りんぼちゃん」がいて、たまに「こんにちは」って出てくるよね。そうすると、Aちゃんもお友達も、みんながにこにこできなくなるよね。

「怒りんぼちゃんが落ち着きますように」  
「どうしたら怒りんぼちゃんがにこにこしていただけるかな」

35

例えば、Aちゃんの中に怒りんぼちゃんが出てくるね。そうすると、Aちゃんもお友達もみんながにこにこできなくなるよねというお話をしたりして、怒りんぼちゃんが落ち着くといいいねとか、どうしたら怒りんぼちゃんがにこにこしていただけるかなとか、そんなお話の仕方があるかなと思います。

これは何がいいかと言うと、子供を否定しないんです。子供の中にそういう部分があるんだ

## (応用)望ましくない行動を減らすための積極的応答

減ってほしい行動(いわゆる問題行動)以外の望ましい行動に積極的に応答することによって、間接的に問題行動を減らしていくアプローチもある。

例) (問題行動)お友達を叩いてしまう

(対応) 叩くような出来事が起こる前に、  
「今日はお友達と仲良くできていて、みんなうれしいね!」  
と積極的に伝える。

※叩かないでいること以外の行動に積極的に応答する。

34

てしまうという、いわゆる問題行動がある子供がいたら、たたいてしまつてから対応するのはなくて、たたくようなことが起こる前に、「今日は友達と仲よくできていて、みんなうれしいね」という感じで、もう前もつて言ってしまう。前もつて積極的にそこを伝えてしまつてしまう感じなんです。つまり、たたく以外の行動をどんどん褒めていくというアプローチになります。

実は、これを意外としていないことがあるかと思ふんですよ。たたくことは目につくんだけれども、そうではない時間も、実はいっぱいあると思ふんです。そうではないときにちゃんと関わっていくということなんです。

問題を取り出して共有するということなんですけれども、どういうことかと言うと、例えば、かんしゃく、いらいらする、手が出てしまつ、一番になりたいという子もいますよね。それを子供の外に取り出す。その取り出し方というのは、本当にイメージとして取り出すんですよ。怒りんぼちゃんとか、パチン君とか、一番君とか、子供たちは適当なネーミングをしているんですけども、そんなふうになつと名前をつけて取り出してあげて、子供と共有するというのもいいかなと思います。

例えば、Aちゃんの中に怒りんぼちゃんが出てくるね。そうすると、Aちゃんもお友達もみんながにこにこできなくなるよねというお話をしたりして、怒りんぼちゃんが落ち着くといいいねとか、どうしたら怒りんぼちゃんがにこにこしていただけるかなとか、そんなお話の仕方があるかなと思います。

これは何がいいかと言うと、子供を否定しないんです。子供の中にそういう部分があるんだ



## 子どもの自信や安心感を育てる I

- できる体験を繰り返し積み重ねる  
→ 取り組む課題、活動のレベル、量などの見極めも重要  
「できた!」→「きっとできる!」→「もっとやってみたい!」
- 強み(できること、得意なこと)に着目する
- その子どものよいところが他のお友達に伝わるように働きかける  
・意識しないと抜けやすいかわり  
・子どもの自己肯定感をしっかり支えることを積極的に意識する

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どもの育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

36

けれども、それに対して私たちは考えていきたいのであって、Aちゃん自身が悪いのではないんだという、子供自身に向かわないアプローチかなという感じがします。そのときに、先生が得意な絵カードとか、描いた絵なども、そのイメージの素材として用いてもいいのかなという感じもします。

先ほどのお話もありましたけれども、自信や安心感を育てる。これは、基本的にとても重要です。できる体験を、本当に繰り返して、繰り返し積み重ねていく。もうこれはしつこいぐらい、できる体験を繰り返すといいかなと思います。

そのときに、できる体験を積んでほしいわけですから、取り組む課題とか、活動のレベル、量といったところを考慮することが重要なんです。これは、多分こちら側の仕事なんだと思うんですよ。周りからすれば、これぐらいなのかなと思うことも、本人からすれば、できたと思えるのであれば、もうそれは十分なんだろうと思うんです。そこを繰り返して、繰り返し積んでいく。やはりできたと思わないと、やってみようとは思わないわけです。できたと思うと、きっと自分ではできると思うので、もっとやってみようという、こんな心の流れがあるかなと思います。

あとは、その子の強み、できることや得意なことに着目していく。その子の良いところがほかのお友達に伝わるように働きかける。これもこちら側のお仕事ですね。やはり気にかかる部分は目につくんですけれども、良いところを積極的に見て、しかもそれをその子にも伝えたり、ほかの子にも伝えたりするのは、意外と意識しなないと抜けやすい部分もあったりするんですよ。なので、そういうところをこちらがかなり意識してやってみるといいかな。そんなことをしながら、子供の自己肯定感を支えていくという関わりです。

そして、意外とこれは大事な部分かなと私も思っているんですが、先生方はたくさんお話すると思うんですけども、実は声のトーンも、人の心、子供の心の安心に関係すると言われるんですよ。なので、高過ぎず、低過ぎず、優しく穏やかな声、話し方をするというのは、とても子供の安心につながるかなと思います。

先生方は忙しいので、結構強い言葉がうわーっと飛び交いますよね。「何とかちゃーん」とか、「駄目でしょう」とか、日頃忙しいので飛び交うんですけども、なるべく声のトーン

## 子どもの自信や安心感を育てる II

- やさしく、穏やかな声のトーンを意識する  
・高すぎず、低すぎず  
・子どもに不安を感じさせないための重要な要素
- 否定的な言葉ではなく、肯定的な言葉で伝える  
例) ~しちゃダメ!~しないで! → ~しようね。~するといいいね。  
・意識的な言い換え。一呼吸おいて言葉を発する。  
・すぐには難しい場合があるが、普段から練習する気持ちで

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どもの育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

37

ンなども意識するといいいかなと思います。

あとは、否定的な言葉ではなくて、肯定的な言葉で伝える。「何とかしては駄目」とか、「何とかしないで」ではなく、「何とかしようね」とか、「何とかするといいいね」と置き換えをするわけです。これも、やはり少し練習が必要かなという感じがします。ぱっとその場に出てくるのはなかなか難しい部分があつて、こんなふうに置き換えられるなどというバリエーションを自分の中にたくさん持つておくといいいかなと思います。

「見通しを伝える」ですけれども、見通しが持てるということは、すごく子供は安定しやすい。そのときに、視覚的な手がかりも添えると、なお分かりやすいかなと思います。

発達上の課題を持っている子供たちは、情報との接触の仕方がバーンとぶつかる感じというのか、何か情報を取り入れて、自分の記憶と少し照らし合わせて、こういうことかと理解したり、では、こうしようと考えようかなプロセスがなかなかうまくいかないようなんですよ。なので、そのバーンと情報にぶつかるような感じを防ぐために、前もって見通しを伝えていくということがとても大事だろーと思います。

どういうことで伝える必要があるかと言うと、今日の流れとか、あしたの予定などはもちろん、予定の変更とか、新しく体験することも前もってお伝えできるといいですよ。

そして、子供とのやり取りの芽を育てて広げていくということですが、これはチューニングのようなイメージでいくといいいかなと思います。子供と同じ行動や言葉を、鏡のように映し返すということは結構いいですね。つまり、子供が言っていることを同じように言ったり、やっている行

## 見通しを伝える

見通しがもてることで、子どもは安定しやすい。  
視覚的手がかり(絵や図、写真など)も積極的に用いて、  
前もって先のことを伝えていく。

子どもの情報取り入れと対処の難しさを周囲が十分に理解する

- 例) ・今日の流れ ・明日の予定  
・予定の変更 ・新しく体験すること

(参考)  
健やか親子推進本部 就学前の子どもの育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

38

## 目標行動までを小さなステップにわける

目標行動までを小さなステップにわけて、段階的に成功体験を積み上げる。

最初のステップを達成

- ほめる・喜ぶ
- 次のステップまで進む
- (繰り返し)
- 目標行動の達成

ステップのわけ方:

- ①行動の一番最初から進む  
例)ホールでのお集まり  
【先生のお膝で過ごす】
- ②行動の一番最後から戻る  
例)お弁当箱の始末  
【お弁当箱袋をロッカーに戻す】

(参考) 健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

40

## 子どもとのやりとりの芽を育てて広げる

子どもの姿やリズムにチューニングするようにかかわり、やりとりを育てていく。

言葉を育てる  
かかわりとしても  
有効

- 例) ・子どもと同じ行動や言葉で映し返す  
→呼応する他者の存在への気づき、  
自分のしていることへの気づき  
・子どもや先生ご自身のしていることや気持ちを  
言葉にして伝える  
→「～しているたのしいね」「今～って思ったのね」

(参考) 健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

39

動をこちらと同じようにしたりすると、あっ、自分と同じことをしている人がそこにいるなという他者への意識になったり、私は今こんなことをしていたんだという自分に対する感覚が高まる。それに、自分への気づきにもなるかなと思います。あとは、子供や先生ご自身のしていることや、気持ちを言葉にして伝える。これを私は実況中継的関わりと言ったりするんですけども、実況中継するように、「何とかして楽しいね」とか、「今、何とかと思ったんだね」とか、その子のことを実況中継しながら伝えたり、自分のことも実況中継してもいいかもしれません。そんなことをしながら、自分のことを見ている、何か呼応する他者がいるんだなという、他者への意識が高まったり、自分に対する意識も高まっていくのかなと思います。こういう関わりは、実は言葉を育てる関わりとしても有効だと言われています。そして、目標行動までをステップに分けるわけですけれども、これができるようになってほしいという望ましい行動があると思うんです。それを目標行動としたとして、それをステップに分けるといいます。スマールステップと言ったりするんですけども、そのステップを順番に達成していくわけです。最初のステップを達成したら、褒める、喜ぶ。次のステップまで進む。また、褒める、喜ぶ。それをどんどん繰り返し、最終的に目標行動が達成されるという流れになります。では、そのステップの分け方、進行の仕方なんですけれども、大きく2通りあります。行動の一番最初から進んでもいいし、一番最後から戻っていいと思います。例えば、ホールでお集まりがなかなか難しいという子供がいると

## 感覚の敏感さへの積極的な防御的対応

感覚の敏感さによる不快な感覚に対して、不快を避ける防御的な対応を行う。

- 例) ・聴覚過敏⇒イヤーマフ使用  
・苦手な感触の衣類⇒着用しない

チクチク、ゴワゴワ

- ・無理強いない
- ・本人が着れる服を複数用意しておく

(参考) 健やか親子推進本部 就学前の子どものための育ちを支援するために  
発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ (cfa.go.jp)

41

して、お集まりのときにわーっと走ってしまいます。こういう子、結構いますよね。そのときに、どんなふうにステップを刻もうかというときに、まずは先生のお膝で過ごせるようになろうかとか、そのお膝で過ごすのも、5分とか10分が難しければ、1分でもいいかもしれません。ステップを本当に刻んであげて、それができれば、もう大拍手なわけです。「今日は頑張れたね」と言っているわけです。ステップを刻んで、一番最初から進んでいく。あるいは、一番最後から戻るといえるのは、お弁当箱をロッカーにしまうという日常的な動作がありますよね。その子はどうしても食べた後にわーっと散らかして遊びに行ってしまう。お片づけができないんだということがあると思います。そのときに、あらかた先生がやってあげてしまう。でも、お弁当箱をロッカーに戻すところは、その子の手が添えられるみたいな感じで、「できたね」と言う。最初はそれでいいかもしれないです。それが、では、もう少し手前からその子ができるようにしてみようかという、だんだん戻っていくようなアプローチでもいいと思います。こんなイメージで、目標行動までをステップに分けて、段階ごとに達成していく。その都度、ちゃんと「よかったね」「よくできたね」と、ちゃんと伝えていくわけです。感覚の過敏さのお話がありましたけれども、聴覚過敏だったらイヤーマフを使うというの、結構最近、ちゃんと見られるようになってきたかなと思います。あとは、苦手な感触、ちくちく、ごわごわするようなものは着用しないとか、感覚の敏感さ、その子からすれば本当に耐え難い苦痛なわけですから、そこを何とか耐えられるようにしようというよりは、防御的な対応を行うことで、まずはいいだろうとは思いますが。それを自分で分かっているようになっていくと、すごくいいわけです。私が関わっていた子供でも、聴覚過敏のお子さんが出て、やはり園での生活音などが駄目なんです。その子は、幼稚園のバッグにイヤーマフを入れて登園するようになって、もう自分で分かかって、「イヤーマフをつけたい」と自分で言うんです。そこまで行くとすばらしいかなという感じがしました。



## 保護者を支援するために

- ・保護者とのかかわりの土台
- ・保護者支援の観点
- ・保護者への伝え方
- ・保育者の心のもち方
- ・就学に向けた支援
- ・保育者を支援する環境を整える
- ・その他のワンポイント

44

## すべての子どもにとって有効

発達上の課題をもつ子どもへの支援は、すべての子どもにとって有効である。

- すべての子どものわかりやすさ、過ごしやすさを高める。
- 環境設定は、ユニバーサルデザイン（発達上の課題の有無によらず、どの子どもにとってもわかりやすく、使いやすいデザイン）を考慮するとよい。

グレーゾーンの子どもに対しても、同じく有効

42

それは、やはりお母さんが丁寧で丁寧に関わってくれた部分もあったんですけれども、その子はそんなふうには幼稚園の段階から、自分でイヤーマフをちゃんと使えるようになったところがありました。

こういった発達上の課題を持つ子供への支援というのは、実は、全ての子供に対して有効なんです。これは、全員にとってすごく過ごしやすさが高まっていくアプローチだと思います。

グレーゾーンの子供にはどうしたらいいんだろうかという質問もあつたんですけども、全く同じ発想でいいかと思います。つまり、発達上の課題がある子も、グレーゾーンの子も、そうではない子も、みんなにとって過ごしやすくなっていく関わりとすることが出来ます。

先生方、保育室やクラスなど、環境設定をすると思うんですが、そのときには、発達上の課題がある子も、ない子も、どの子でも分かりやすく使いやすい、これはユニバーサルデザインとよく言いますけれども、ユニバーサルデザインであることを意識するといのかなと思います。

では、「保護者を支援するために」ですけれども、幾つかの観点からまとめてみました。

関わりの土台ですけれども、関係をつくることからというところで、関係をつくるというのは、いわゆる人と人との基本的な関係性だけではなく、支援者としての信頼を得ることかなと思います。信頼を得ることが関係をつくることだろうというの、子供の姿をよく見てくれていると感じられること。こちら側の関わりの内容や考え方がちゃんと伝わっていること。こんなことをしながら関係をつくっていくんだらうと思います。

そして、これは私がすごく大事にしている部分

保護者とのかかわりの土台

## 「気になる」ではなく「気にかけている」

「気になる」ではなく「気にかけている」

- 基本的な心の構え方として
- 保護者にも「気にかけている」の表現で話す。

### 気になる

- ・標準範囲からの逸脱のニュアンス
- ・対象化、レッテル貼り
- ・保護者との心の距離を遠くする。

### 気にかけている

- ・ともにある、包み込むニュアンス
- ・支援的かかわりとセット
- ・「このような部分を気にかけていて、こんな風に対応してみました。そうしたら・・・」

47

保護者とのかかわりの土台

## 関係を作ることから

関係を作るとは=支援者としての信頼を得ること

- ・人と人との基本的なかかわりがなされていること
- ・子どもの姿をよく見てくれていると保護者に感じられること
- ・支援者のかかわりの内容や考え方が保護者に伝わっていること

46

ではあるんですが、今日のテーマも「気になる」という言葉が入っていて、いろいろな文献、研究などでも「気になる」という言葉は共通言語としてよく使っているんですけども、やはり臨床、実践上は、「気にかけている」に置き換えるといかなと思いますね。というのは、「気になる」というのは、標準からの逸脱のイメージなんですよね。あの子は標準範囲にいないよねという、逸脱した子供という感覚になるかなと思います。

一方、「気にかけている」というのは、その子とともにある、包み込むようなニュアンスに変わることかなと思います。気にかけるわけですから、支援的関わりをするわけです。なので、「気にかけている」という言葉に置き換えると、こんな部分を気にかけていて、こんなふうに対応してみたいんです。そうしたら、こんな感じというふうに関わりとセットになってくるかなと思います。なので、私は保護者の方にも「気にかけています」という表現をとてもよく使っています。

保護者支援の観点ですけれども、まずはサポート状況を考えてみるというかなと思います。私たち、子供のことは一生懸命考えるんですけども、保護者のことも少し落ちて理解してみようと考えるといいかなと思います。その方の支援状況サポート状況はどんな感じかなと考えられます。一般的には、サポートが多いほうが精神的健康にはいいということが分かっています。

家族内で子供の発達上の課題に対する考え方の違いがあるか、ないか。これも大事なポイントです。違いがあることは、結構よく目にする状況ではありますよね。特に夫婦間で違いがある場合には影響が大きいかなと思います。

こんなことを言うと、ちよつといろいろなこ

## 家族内での考え方の相違は？

子どもの発達上の課題に対して、家族内で考え方の相違がある場合に、保護者に大きなストレスがかかる。

- ・発達上の課題がある × 心配する必要はない
- ・療育を受けた方がよい × 必要はない
- ・受診した方がよい × 必要はない

夫婦間で相違がある場合に、その影響はとくに大きい。

50

ろから怒られそうなんだけれども、多くの場合、お母さんの理解のほうが先行しやすいかなと思います。これは、先生方の実感としてもそうではないかなと思うんですけども、これは私の臨床実感としてもそうです。むしろ理解することへの抵抗がお父さん側に生じることが多いかなという印象があります。

何でそうなるのかなと思って、私のほうで3点挙げてみました。

やはり相談の場に来るのがお母さん単独であることが圧倒的に多いと思うんです。共働きでお母さんがお仕事をしている、お母さんがお仕事をお休みにして面談に来ることが多いかなという感じがします。つまり、支援者とお母さんのお話を進めるテンポにお父さんは取り残されてしまうかなという感じがします。そういうところ、じかに話をしていないので理解しにくい、抵抗が生じやすいということもあるかなというところ、これは私の臨床実感なんですけれども、お父さんのほうが社会的自立への不安を感じやすい側面があるかなという印象があります。それがために、子供の発達上の課題に対して、不安、抵抗が高まりやすいという感じがあるという印象を持っています。

そんな感じで、夫婦間でキャップが生じるときは、大体お母さんのほうが少し先行して理解が進んでいて、いや、実は、夫はそうではなくてということが多いパターンかなという感じがします。

そういうときにどうするかなんですけれども、私はこんなふうにやっていますよというところで、支援者の側でも、目の前にいるのはお母さんなんだけれども、今日その場にはいないお父さんの思いにも意識を向けながら関わっていくことがとても大事かなと思うんです。例えば、夫婦間ではどの

## 保護者のサポート状況は？

保護者が得ている、あるいは得られる可能性のあるサポートを考える。

- ・夫婦間でのサポート
- ・祖父母からのサポート
- ・ママ友同士の関係性
- ・支援者との関係性

一般的には、サポートが多い方が精神的健康は保たれやすい。

49

ろから怒られそうなんだけれども、多くの場合、お母さんの理解のほうが先行しやすいかなと思います。これは、先生方の実感としてもそうではないかなと思うんですけども、これは私の臨床実感としてもそうです。むしろ理解することへの抵抗がお父さん側に生じることが多いかなという印象があります。

何でそうなるのかなと思って、私のほうで3点挙げてみました。

やはり相談の場に来るのがお母さん単独であることが圧倒的に多いと思うんです。共働きでお母さんがお仕事をしている、お母さんがお仕事をお休みにして面談に来ることが多いかなという感じがします。つまり、支援者とお母さんのお話を進めるテンポにお父さんは取り残されてしまうかなという感じがします。そういうところ、じかに話をしていないので理解しにくい、抵抗が生じやすいということもあるかなというところ、これは私の臨床実感なんですけれども、お父さんのほうが社会的自立への不安を感じやすい側面があるかなという印象があります。それがために、子供の発達上の課題に対して、不安、抵抗が高まりやすいという感じがあるという印象を持っています。

## 夫婦間での考え方の相違への対応

- 支援者の側でも、目の前にいる母親の思いのみならず、父親の思いにも意識を向けながらかかわる。

—「夫婦間ではどのように話をされていますか」

- 父親との共有を積極的にサポートする。

—「今日、こんな話をしたということ（父親にも）伝えられそうですか」  
—「どんな風にお話ししましょうね」

- 支援者と話す場に父親も積極的に加えていく。

—大事な話をするときには、「ぜひお二人で」とこちらからも場を設定するとよい。

52

いろいろな頑張るんだけど、やはり関わりを持つことが難しいという状況はどうしてもあると思うんです。そのときには、保護者を変えるんだということにあまり意識を向け過ぎないことも大事かなと思います。

私は、心理士として発達支援以外のいろいろな心理的な支援もしているわけですけども、変わりたいと思っていらいっしやる方でも、なかなか変わることは時間がかかるんです。つまり、変わりたいというニーズを強く持つていらいっしやるわけではない保護者を変えることはなかなか難しいわけですから、本当に難しい場合には、そこに意識を向け過ぎない。そして、子供との関わりにエネルギーを向けることが大事かな。やはり子供が変わっていくことで、結果的に保護者の変化が後押しされることはありますよね。

## 夫婦間での考え方の相違

多くの場合、母親の理解の方が先行しやすい。

—むしろ、理解することへの抵抗が父親側に生じることもある。

### 考えられる要因

- ① 相談の場に来るのは母親単独であることが多く、支援者と母親の進行するテンポに父親が取り残される。
- ② 支援者と直接話していないがために理解しにくく、抵抗も生じやすい。
- ③ 父親の方が社会的自立への不安を感じやすい側面があり、子どもの発達上の課題への不安や抵抗が高まりやすい。

51

ようにお話をされていますかということ、あえてその場でお話することもあります。

あとは、お父さんとの共有を積極的にサポートする。例えば、今日、ここでこんなお話をしたということをお父さんにも伝えられそうですか、お話しできそうですかとか、そんなお母さんの感触を少し尋ねてみる。「いや、難しい気がします」とか、「何かうまく言えそうにないな」とか、その難しさをお話しされるお母さんもあります。

そのときには、「ああ、そうなんです。では、どんなふうにお話ししましょうね」というふうには、夫婦間での共有をめぐって、少し時間を丁寧にとってお話することもあります。

あとは、ここぞという大事なお話をするときには、お父さんも加えていく。ぜひお二人でお越しくださいというふうには、こちらから積極的にお伝えするというのもいいかなと思います。



保護者支援の観点

## 現実に対処する力は？

### 現実に対処する力とは？

- ・不安やストレスに耐える力
- ・必要な情報を収集する力
- ・情報を整理して理解する力
- ・具体的水準から離れて応用的、抽象的に考える力
- ・必要な援助を求める力

保護者の姿に応じて、支援者のかかわりを工夫する必要がある。

54

保護者支援の観点

## 保護者とかかわりをもつことが難しいときには

- 保護者を変えようとすることに意識を向けすぎない。  
一人の変容は、“変わりたい”という本人の意思がある場合であっても、少しずつ時間をかけて生じるもの
- 子どもとかかわりにエネルギーを向ける。  
—子どもの伸びや、子どもが変わっていくことによって、保護者の変容が後押しされることがある。  
—ただし、保護者を越えた立場にならない。保護者のかかわりをエンパワメントする気持ちをもつ。

53

ただし、お話をするとときに、保護者を越えないことが大事ななところは私に思っています。つまり、自分との関わりではこの子はこんなに落ち着くんだけれども、保育園、幼稚園ではこんな感じなんだけれども、おうちではどうもうまくいかないというふうには、自分たちの関わりの方がうまくできていて、どうも保護者の関わりの方がなかなかスムーズにいかないという話ではなくて、ちゃんと保護者をエンパワメントしていくという意識をちゃんと持つことが大事ななと思います。

そして、保護者の現実対処力を考えることが大事かなと思います。現実に対処する力というのは、不安やストレスに耐える力とか、いろいろな観点があります。つまり、保護者の姿に応じて、私たちは関わりを工夫する必要がある、子供と同じくあるわけです。

保護者の不安が強いときという質問も今日はありましたけれども、では、なぜ保護者の不安が下らないのか。やはり問題が解決されないからということがある、今、すごく大変な状況にあるときというの、なかなか不安は下らないと思います。ふだんはそこまで動揺しない方であっても、かなり動揺する姿を示すことはよくあると思うんです。なので、問題解決がなかなかうまく進んでいかないときというのは、いわゆるここぞという場面ですよ。ここぞというときには、とにかくしっかり時間をかけて、こちらから労力を割いて向き合うことが大事ななと思います。

そういうときに、時間をしっかりとって、こちら側も向き合う。誰が担当するか、担当の先生、プラス園長先生に入ってもらおうとか、こちら側も複数でしっかりお迎えして、ちゃんとお話をしよ

ただし、お話をするとときに、保護者を越えないことが大事ななところは私に思っています。つまり、自分との関わりではこの子はこんなに落ち着くんだけれども、保育園、幼稚園ではこんな感じなんだけれども、おうちではどうもうまくいかないというふうには、自分たちの関わりの方がうまくできていて、どうも保護者の関わりの方がなかなかスムーズにいかないという話ではなくて、ちゃんと保護者をエンパワメントしていくという意識をちゃんと持つことが大事ななと思います。

そして、保護者の現実対処力を考えることが大事かなと思います。現実に対処する力というのは、不安やストレスに耐える力とか、いろいろな観点があります。つまり、保護者の姿に応じて、私たちは関わりを工夫する必要がある、子供と同じくあるわけです。

保護者への伝え方

## ポジティブな面も伝える

発達上の課題の伝達に意識が向きすぎると、そのことのみを「問題」として伝えてしまう場合がある。

- ➔受け入れがたさ
- ➔支援者への不信感や拒否感

支援者が子どもの育ち全体を大切に見ていることが伝わりやすい。57

### 伝達・共有内容

発達の課題

よいところ・育ってきているところ

保護者支援の観点

## たとえば保護者の不安が強いときには

- なぜ不安が下らないのか？
- ・面談の場をもつ。
  - ・問題が解決されないから
  - ・問題を共有し、適切な対応を図る。など
  - ・ここぞというときには、時間をかけてしっかりと向き合うことが重要。
  - ・そのときに、相手を批判的に思う気持ちがあると、おそろくうまくいかない。保育者のなかのあたたかい共感的な思いが大切。
  - あるいは、もともとの不安が高いから
  - ・対応の枠組みを決めて、不安をおさめていく安定した枠を作る。
  - ・連絡帳でやりとりをこんな風にしましょう。
  - ・週に一度15分ほどゆっくりお話ししましょう。 など

55

うねとか、ここぞという場面では、しっかりと向き合うことが大事ななと思います。

そのときに、このお母さんはすごく不安が強く、なかなか大変なんだという、相手を批判的に思う気持ちが根っこにあると、多分うまくいかないと思うんです。このお母さんが、なぜこんなふうに訴えるのかというところに共感的な目線をちゃんと持っていないと、その批判的なニュアンスはちゃんと伝わってしまうと思うんです。なので、ちゃんと寄り添うような温かい共感的な目線を持ちながら向き合うことが大事だろうと思います。

あるいは、もともとの不安の高さには個人差があるんです。もともとの不安が高いから不安が下らないという場合もあります。そういうときには、対応の枠組みを決めることも1つのアイデアだろうと思います。つまり、ちゃんと不安を収めていけるような枠をしっかりとつくるというイメージなんです。

例えば、連絡帳でこんなふうにより取りをしましょうと、ちゃんと共有するというか、こんなふうにしていきましょうねということをあえて共有するとか、週に1度、15分ほどゆっくりお話ししませんかとか、そんな感じで、その方の不安を収めていく枠をしっかりとつくるというのも1つの工夫かなと思います。

では、どんなふう伝えるかですけども、これは先生方、やっていらっしゃるかなと思うんですが、発達上の課題は伝えるんだけど、プラス必ずポジティブな面を伝えることが大事ななと思います。つまり、発達上の課題、こんなところがあるんですけどというところだけを伝えると、それは当然、受け入れづらいですよ。それで、そういうことを言うてくる支援者に対して、不信感



保護者への伝え方

### 発達上の問題ではなく適応状況に焦点を当てる

障害特性や知的発達のおつきりさの話を中心にせず、実際の適応上の問題に焦点を当てて話をします。

- 適応上の問題状況と、その程度の方がより重要
- その際、支援や配慮を積極的にしていくと、その子自身がより過ごしやすく、力をより発揮できると考えている、というニュアンスで伝える。

たとえばDSM-5の知的能力障害／知的発達症の診断基準からは、具体的なIQの数値は削除されている。

- 生活適応上の重症度評価に視点
- ただし、IQの数値自体を軽視するものではない。

59

「何とか君は、何とかがすごく好きなんです。すごく楽しんでお話ししますよ。どこであんなふうに知るんでしょうね」とか、「でも、A君自身は楽しそうにお話しているんだけど、お友達のお話をすることがなかなか難しい部分

困っているのは誰かを考えることも大事だと思います。つまり、保育者が困っている子供の様子のニュアンス、そういう気持ち、観点でお話をしていると、やはり受け入れにくいかなと思うので、子供自身が困っているという、実感はないかもしれないけれども、子供自身が分かってくれている、助けを求めている様子があった、それを気にかけて、こんな対応をしていますよというニュアンスかなと思います。

保護者自身に関しては、保護者自身も困り感や、いら立ち、何か分からない感じなどを、実は内的に抱えていることがありますよね。そこに温かく問いかけていくような感じで、何かお話をすると、ぼつりぼつりとお話をされるようなことがあったりす

保護者への伝え方

### 特性ではなくその子自身の話をする

発達上の課題について保護者に話す際に、「このようなところがある」と子どものもつ特性を伝えることに意識が傾きすぎてしまうと、保護者は抵抗を抱きやすい。

- 「発達障害かどうかの話をしたくないわけではない」
- 「発達障害に当てはめようとしている」

特性も子どもの一部であり、一人の子どもの育ちのなかで見られる姿であることを、支援者側も意識して話すことが重要である。

58

や拒否感が湧いてくることも当然あるかなと思います。

なので、発達の課題、プラス良いところや育ってきているところ、それらをちゃんと全体としてお伝えする。そうすると、この先生は子供を全体としてちゃんと見てくれていて、その中でこの部分のお話をしてくれているんだということが伝わりやすいかなと思います。

そして、特性ではなくて、その子自身の話をする。やはりちゃんと伝えようと思うと、「こんなところがありますよ」という特性のことを伝えることに気持ちが向きやすいと思うんですが、そこに終始してしまうと、お母さんの中で、「発達障がいかどうかという話をしたいわけではないんです」とか、「発達障がいには当てはめようとしている感じがします」ということがあるかなと思います。そうではなくて、そういう部分を持った子供なんだ、その子自身なんだという、その子、その子のお話をするのが大事かなと思います。

なかなかうまく具体例がぱつと浮かばないんだけれども、例えば、その子のすごく大事な興味関心があつて、その子はそのことをうわーつとお話してしまうので、お友達はすごく困ってしまうとか、よくある状況ですよ。そのときに、この子はそういう自分の好きな世界があつて、そのことをうわーつとお話してしまうんだということだけを言ってしまうと、うまくいかないかなと思いますよ。

保護者への伝え方

### 理解と対応をセットにして伝える

**理解**（「このようなところがあります」）だけを伝えると、保護者の不安や抵抗感を生じさせやすい。

- 「だからどうすればいいんですか!？」

**対応**（「このような工夫をしてみました」「こんなかわりをしていきたいと思っています」）をセットにして伝えることで、安心感や信頼につながる。

「Aさんは一人で好きな遊びをすることが多いです。でも、そばに行ってお話すると、とても熱心に教えてくれるんですよ。少しずつ人のかかわりも広げていけたらと思っています」

60

があるので、たまに私が少し間に入って関わったりすることがあるんですよ」とか、今のニュアンスの違いは伝わりましたか。その子自身のお話をするというのが大事かなという感じがします。

そして、発達上の特性や知的発達のおつきりさがどの程度かということが大事なのではなくて、実際のその子の適応が何より大事なんですよ。すごく強い特性があつたとしても、うまく集団場面や、その子の社会的な状況の中で適応できていれば、それは問題ないわけです。さっきの社会モデルに話を通じるんでしょうか。

なので、その子の適応状況を支援するという観点で、支援や配慮を積極的にしていくと、その子自身がより過ごしやすく、力をより発揮できるんだという、適応を高めていくという構えをしつかり持ちながらお話をするのが大事かなと思います。



保護者への伝え方

## 療育へのつなげ方

子どもの発達

①気にかけている点について伝達、共有したうえで、

“発達について気にかける”状態になっていることが大前提。  
受給者証の発行手続きなど、保護者の意思がなくては進められない。

②療育を受けることのメリットについて話す。

- ・ものごとに取り組む力を伸ばす
- ・人のかかわりを伸ばす
- ・刺激をたくさん受けながら発達全体を底上げするように伸ばしていく など

62

保護者への伝え方

## 困っているのは誰か?を考える

“保育者が困っている子どもの様子”として伝えると、保護者は受け入れにくい。

—本人が困っている、わからなくなっている、助けを求めている様子があり、それを気にかけてこのように対応している、と話すと比較的伝わりやすい。

—保護者自身の困り感、いらだち、わからなさなどについて、あたたかく問いかけると、保護者の思いが語られることがある。

その際、本見についてよく知っている協力者の立場にあることが保護者に伝わるように意識する。

61

るし、そのときに、私はお母さん、お父さんの協力者なんですよというところがちゃんと伝わるような話の仕方が大事なかなと思います。この子についてよく知っている協力者なんですよということころで、一緒に考えていきましょうということが伝わるような感じでお話をしていくと、比較的伝わりやすいかなと思います。

では、療育へのつなげ方ですけれども、やはり気にかけている点について伝えて、共有しないと、それが第1ステップです。つまり、療育を受けるとは、受給者証の発行など、保護者の行動なしでは進まないわけです。なので、まず保護者自身が、あっ、そうなんだなと、発達について気にかけるという状況になっていることが大事で、なかなかこれが難しいんだらうと思うんです。

それで、療育を受けることのメリットですけれども、いろいろな表現があるかなと思います。物事に取り組む力を伸ばすとか、人との関わりを伸ばすとか、刺激をたくさん受けながら発達全体を底上げするように伸ばしていくとか、いろいろな言い方があるかなと思います。

私も、つい最近、ちょうどお母さんとお父さんとそんなお話をして、そのときに何を言ったのかなと思いついたんですけれども、「この子をいろいろな人に見てもらいたいながら、この子をみんな大きくしていきたいましよう」とか、そんなことを言ったりもしましたかね。

「療育へのつなげ方:話し方の例」です。これは、私はこんなふうに言うことがありますよという例をピックアップしてみました。

「習い事に通うような気持ちで利用してもらって大丈夫ですよ」と。実際に通う実感としては、こんな感じが近いかなと思うんです。ただし、決

保護者への伝え方

## ネガティブな感情は機を逃さずに共有する

- もし可能であれば、その場で共有できるとよい。
- 取り扱われないネガティブな感情は、思いがけない方向で増幅したり、関係の悪化につながりやすい。

「今日突然このようなお話をして、とても気持ちを動揺させてしまったと思います。もしよろしければ、Aさんにとってよいかわりや環境を整えていくことを、これから一緒に考えさせていただければと思っています」

64

保護者への伝え方

## 療育へのつなげ方:話し方の例

- ・「ならないごとに通うような気持ちで利用してもらって大丈夫ですよ」  
ただし、けっして“ならないごと”ではなく、子どもの発達支援のために通う場所との意識はそらさないようにする。
- ・「必要がなくなったら卒業したらいいと思います。もしそのまま小学校に入ってから必要と思ったら続けたいし、途中でもう卒業できるね、となったら卒業したらいいですよ」
- ・「やっぱり必要がなかったね、というのはいいと思います。むしろ、もっと早く行ってあげればよかった、と後から思うことの方がよくないので」
- ・「なるべく早くから療育を受けた方が効果は大きいんですよ」

63

して習い事ではないので、子供の発達支援のために行っているんだという意識はそらさないようにお話をすることもあります。

そして、「必要がなくなったら卒業したらいいと思いますよ。でも、そのまま小学校に入ってから必要と思ったら続けたいし、途中でもう卒業できるねとなったら卒業したらいいですよ」とか、「やはり必要がなかったね」というのはいいと思うんだけど、むしろもっと早く行ってあげればよかったねと後から思うことのほうがよくないと思うので」と言ったり、「なるべく早くから療育を受けたほうが効果は大きいんですよ」とか、いろいろなことを相手の様子を見ながら、どんな不安があるんだらうというところをちゃんと感じ取りながらお話をしたいと思います。

そして、どうしてもこういう大事なお話をするときというのは、保護者の中にネガティブな感情が湧いてくることはあるかなと思います。そのときには、もし可能であれば、結構これは実践の応用編な感じはするんだけど、なるべくその場で共有できるといいかなという感じがします。その場を取り扱われないと、思いがけないところで増幅してしまったり、急に関係が悪化するということがあるわけです。なので、なるべくその場で共有できるといいかなと思います。

そのときにどんなふうに言うかですけれども、私もこんなふうに言うことがあるかなと思って書いてみました。

「今日は突然こんなお話をして、とても気持ちを動揺させてしまったと思います。もしよろしければ、Aさんにとってよい関わりや環境を整えていくことをこれから一緒に考えさせていただ

## 保育者側の安定感・一貫性を保つ

- 保護者の反応(拒絶や怒りなど)によって、保育者も当然ながら動揺し、対応する反応(距離を置く、表情がこわばるなど)が生じやすい。
- 保育者側が**以前と変わらず、穏やかに安定した態度を保つ**ことで、保護者は意識的、無意識的に安心する。

それが継続的なかかわりのペースとなる信頼につながっていく。

67

そのときに、こちらも人間ですから、いろいろな不安が湧くんだけれども、本当に変わらず、一貫した態度を保つことが支援には大事なかなと思うんです。

これは、専門職のトレーニングかなという感じもします。最初からはできない気がするんです。でも、専門職として、対人支援、対人援助職となると、この関わりができることがすごく大事なところで、何があっても変わらず、穏やかに関係を保つということが大事なかなと思います。そうする

でも、そういうとても難しいお話を受けとめて、動揺したり、ネガティブな反応があることはとても自然な感情なんですよ。なので、それは当然だなと思いつつ、ちゃんとここから関わりが始まりだなと思いつつ、考えていくことが大事かなと思います。つまり、自分の不安感、支援者側の不安感に目を向け過ぎないことが大事なかなと思います。

## 保護者の体験に視点を置く

- 保護者の身になって思いをめぐらせて考える。
- 子どもの発達上の課題を伝えた際に**動揺や不安が高まることはごく自然なことである。**
  - たとえ強いネガティブな反応(拒絶や怒りなど)が引き起こされたとしても、それは**自然な感情反応**であることを踏まえておく。

支援者が不安になり、支援者自身の体験に重きを置いてしまうと、理解してもらえなかったと被害的になったり、理解しない保護者だとして他責的(保護者を責める)になったりする。

66

ればと思つています」とか、こんなことをお話ししながら、その場で生じた動揺や不安、あるいは怒りなどを、なるべくその場で共有できるといいかなと思います。

では、「保育者の心の持ち方」ということで、私は違った職種ではあるんですけども、少し用意してみました。

どうしても、すごく難しい状況だと、こちら側も不安になりますよね。なので、こちら側の気持ちに目が向いてしまうとと思うんです。自分の不安感のほうに目が向いてしまうと、保護者に理解してもらえなかったと被害的になったり、何かあのお母さんは全然お話を理解してくれなかったというふうな、相手を責めるような他責的になることもあるかなと思うんです。

## 支援者個人の支援力の問題として考えすぎない

対応がうまくいかない場合に、保育者は個人の力量の問題として考えすぎてしまうことがある。

—無力感や自己否定感、あるいは被害的な感覚を抱くことにつながりやすい。

誰がどのようにやっても難しい状況はあり、保育者個人と切り離して問題をとらえることも重要である。

69

つまり、言いたいことは、うまくいかないとき

外と言葉では受け入れ難い状況でも、ちゃんと行動変容している場合もありますので、あまり動揺しないで、保護者全体を受けとめながら関わるといいかなと思います。

そして、これは私はすごく大事な部分かなと思つて、ぜひお伝えしたいところではあるんですが、誰がどのようにやっても難しい状況はあるんです。今日、私がこういう立場でお話をしていまして、決してうまくいっているわけではなくて、いつも悩みながら、どうしたらいいのかなと思いつつ実践をしているわけです。私も保育現場に関わりながら、どうしたらもっとちゃんとできるんだろうとか、自分ももっと勉強しないといけないなとか思いつつやっています。今日はそういう立場でお話しているわけです。

## 言葉ではなく行動をみることも大切

言葉では受け入れがたさを示していても、その後の行動では療育を検討していたり、情報収集をする姿がみられることもある。

目の前の言葉や様子に目をとられず、保護者の姿全体を見守っていくような視点をもつことが大切

68

ことで、保護者は自覚しないかもしれないけれども、この先生とお話をしていけそうかなとか、信頼感や安心感につながっていくのかなという感じがします。なので、保護者は当然いろいろな反応をされるかもしれないけれども、それにかかわらず、こちらは本当に変わらず、穏やかに安定感を保つことが大事だろうと思います。

これは、私が臨床実感として持っている部分ではあるんですが、お話をしている、言葉では受け入れられない感じを示している、ちゃんと行動が変わっていくお母さんがいらつしやるんです。

私自身が、今日はお母さんにお伝えできなかったなと思うような面接をしたとしても、次のときにお会いすると、ちゃんと療育を検討していたり、情報収集をしていたりするんです。つまり、そのとき言葉にとられず、その方の行動全体を見ることも大事なかなという感じがします。なので、意



就学に向けた支援

## 保護者が考えるプロセスを支援する

就学後の特別支援について、保護者が考え、判断するプロセスを支援する。

- 通常級がよいのか、支援級（あるいは支援学校）がよいのか。
- 子どもが通う可能性のある小学校の状況（規模、特別支援の状況など）について、ある程度の情報を得ておくと、保護者の相談に具体的に対応しやすい。

考えるプロセスそのものが、保護者にとって、あらためて子どもの姿を理解し、必要な支援を検討する重要な機会となる。 72

就学に向けた支援

## 就学までの道筋の理解

就学に向けた教育相談の始まりなど、地域での就学相談プロセスを理解しておく。

- 必要に応じて、保護者に情報を伝達できるようにする。

保育者が落ち着いて伴走し、ときにガイドしながら不安や焦りなどに寄り添うことで、一つひとつ対応を進める保護者をバックアップする。 71

に、支援者が個人の力量の問題として考え過ぎないほうがいいのかという感じはします。つまり、そこを考え過ぎてしまうと、無力感や自己否定感、あるいは被害的な感覚を持つこととなってしまいかないと思うので、あまり個人の問題に還元し過ぎないことが大事だろうとは思っています。それとは別に、ちゃんと力をつけようというその感覚は大事なことだと思います。あまり個人の問題にしすぎないことです。

そして、就学に向けて、今回は全国の方が対象ということなんですけれども、地域、地域で全くプロセスが違うのかというか、プロセスは同じかもしれないけれども、何かシステムが違うのかなという感じもしますので、その地域での就学相談プロセスというものを理解していくといいかなと思います。

そうすると、必要に応じて情報提供できたり、時にはガイドしたり、バックアップなどできるかなと思います。

そして、就学相談は、実はすごく大事な機会でもあると思うんです。幼児期を過ごしてきていて、1回、ちゃんと子供の発達に向き合わざるを得ない局面だと思うんです。教育の側から言うと、判定をするわけですけども、保護者の側からしても、やはり悩むわけです。通常級がいいのか、支援級がいいのか、場合によっては支援学校がいいのかという判断をする場合もあると思います。

この就学相談というのは、改めてここで1回、保護者が自分のお子さんの発達状況をちゃんと理解したり、望ましい環境を考えたり、今後、どのようにしていくといいのかというところを一度しっかり考えられる、すごく大きな機会でもあると思うんです。そういう機会なんだということ

に、支援者が個人の力量の問題として考え過ぎないほうがいいのかという感じはします。つまり、そこを考え過ぎてしまうと、無力感や自己否定感、あるいは被害的な感覚を持つこととなってしまいかないと思うので、あまり個人の問題に還元し過ぎないことが大事だろうとは思っています。それとは別に、ちゃんと力をつけようというその感覚は大事なことだと思います。あまり個人の問題にしすぎないことです。

そして、就学に向けて、今回は全国の方が対象ということなんですけれども、地域、地域で全くプロセスが違うのかというか、プロセスは同じかもしれないけれども、何かシステムが違うのかなという感じもしますので、その地域での就学相談プロセスというものを理解していくといいかなと思います。

そうすると、必要に応じて情報提供できたり、時にはガイドしたり、バックアップなどできるかなと思います。

そして、就学相談は、実はすごく大事な機会でもあると思うんです。幼児期を過ごしてきていて、1回、ちゃんと子供の発達に向き合わざるを得ない局面だと思うんです。教育の側から言うと、判定をするわけですけども、保護者の側からしても、やはり悩むわけです。通常級がいいのか、支援級がいいのか、場合によっては支援学校がいいのかという判断をする場合もあると思います。

この就学相談というのは、改めてここで1回、保護者が自分のお子さんの発達状況をちゃんと理解したり、望ましい環境を考えたり、今後、どのようにしていくといいのかというところを一度しっかり考えられる、すごく大きな機会でもあると思うんです。そういう機会なんだということ

保育者を支援する環境を整える

## 支援の困難に対する職場全体での視点の共有

- 保育者個人の問題として考えすぎないという視点を職場全体で共有することで、個人の安心感や安全感は格段に上がる。
  - 相談のしやすさにつながる。
- 一人の保育者が対応の問題から心理的問題に至るようなことがあったとしたら、職場環境全体の問題として考えることも必要である。
  - サポート体制はどうだったのか。
  - 自分にできることはあったのか。

75

就学に向けた支援

## 最終的には支援のまとめをするイメージで

保育者とかかわりの期間のなかで理解できたこと、考えられたことについて、保護者との間でまとめを行う。

- ・ 伸びたこと
- ・ まだ課題として残っていること
- ・ 有効だったかかわりの工夫・環境調整
- ・ 次のステップ（小学校入学後）のなかで課題として生じそうなことの予測
- ・ 次のステップでも、引き続き行くとよさそうな工夫・環境調整

73

をこちらも感じながら、そのプロセスを支援していくという感じでしょうか。

それは、特段のことではなくても、どうだったということ立ち話でお話ししてもいいかもしれないし、来週、就学時健診だねということは何げなくお話をしてもいいかもしれないし、そのお母さん、お父さんが、「いや、何かこうで、こうで」とぼろりぼろりとお話しされる。それを聞けるといのが保育現場かなと思いますので、そこを伴走していくところも大事かなと思います。

最終的には、就学に向けての支援のまとめ、つまり、保護者と先生方との関わりの期間の中で、理解できたこと、考えられたことについて、まとめを行いたい。例えば、伸びたこと、一方で、まだ課題として残っていること、有効だった関わりの工夫や環境調整、次のステップ、小学校入学後の中で課題として生じそうなことの予測、次のステップでも引き続き行くとよさそうな工夫や環境調整、こんなところを1回まとめとしてお話しできるかというかなと思います。

先生方、要録などを書くと思うんですけども、そんなところを保護者ともじっくりお話しできるかというかなという感じがします。一緒に小学校に出すサポートシートなどを書く機会もあるかなと思いますので、そんなときにお話しできるかというかなと思います。

保育者を支援する環境についてですけども、先ほどの話にも関係しますが、やはり保育者個人の問題として考え過ぎないということも職場全体で共有することが大事かなと思います。ある先生の力の問題でうまくいっていないんだではなくて、そういうふうな考え過ぎない。それを職場全体でちゃんと共有しておくこと。そうする





その他のワンポイント

## 今後の見通しの共有は現実から離れない

子どもの姿に忠実に話す。現実から離れた話をしない。

- × “将来的には、同じ年くらいの子どもの追いつくと思います”
- × “療育を受けていけば、きっと（特性が消失するかのように）よくなりますよ”

“治る” “なくなる” のような考え方ではなく、  
できることを伸ばし、あるいは増やしなが  
ら、その子の適応を高めていくという視点を共有する。

82

保育者を支援する環境を整える

## “ほっとする” 時間があること

- いわゆる“ほっとする” 時間のある職場環境であるかどうか。
- ちょっとした「おしゃべり」ができる環境が、保育者を有形無形に支える。
- 話すことで心のなかの不安や負担感を外に出すことができる。  
——見関係のないようなことをおしゃべりするだけでも間接的に心の荷が下りる。

とくに不安を感じやすい若手にとって、なお必要である。

80

に子供の姿をまとめていく。項目ごとに書いても  
いいかなと思います。

私は、心理士としてスクールカウンセラーで  
入っているの、心理士の所見という感じでも、  
数行、書いたりするんです。そんな1枚の紙を用  
意して、「では、これを持って行ってくださいね」  
というふうにはバックアップすることもあります。

あとは、職場なんだけれども、ほっとする時間  
があることはとても大事なことです。こうい  
う職場というのは、若手がいろいろな意味ですご  
く危機に陥りやすいと思うんです。やはり若手  
を支援するという意味でも、ちょっとしたおしゃべ  
りができるということはとても大事なかなと思  
います。仕事に関係あること、関係ないこと、  
何げないことをぼろぼろとお話をできるとい  
うことがとても大事かなと思います。

その他ですけれども、今後の見通しの共有につ  
いては、現実から離れない。これは、ついつい離  
れたことを言いたくなってしまっている。若干  
離れた話をしてしまう部分があつて、けれど、こ  
れはしないほうがいいです。子供の姿に忠実に話  
す。つまり、「将来的には同じ年くらいの子供に  
追いつくと思いますよ」とか、「療育を受けてい  
けば、きっとよくなりますよ」とか、よくなるん  
だけれども、特性が消えるかのようなニュアンス  
で言わないほうがいいだろうということ。つ  
まり、現実から離れた話はしないで、あくまで子  
供の姿に沿ってお話をしていく。

先ほどの繰り返しになりますけれども、治ると  
か、なくなるといふ発想ではなくて、できること  
を伸ばして、あるいは増やしなが、適応を高め  
ていくという方向性だと思えます。

そして、元も子もない部分もあるんですけれども、

その他のワンポイント

## “機が熟す” まで待つことも重要

- 支援者が伝えたい、かかわりたいタイミングが必ずしも保護者にとつての適時とは限らない。  
——“保護者にとって”，機が早すぎることもある。
- 保護者にとって適時ではない介入は、準備の整っていない心に土足で踏み入るような乱暴なものとして体験されることがある。

「しばらく様子を見させてくださいね」という経過観察についての理解を得たうえで、機を待つことが必要な場合もある。

83

機が熟すまで待つことも重要だろうと思えます。  
もちろん、ちゃんと早期支援できればいいんですが、  
こちらが関わりたい、ちゃんとお話をしたいとい  
うタイミングが、保護者にとっては機が早いとい  
うところもあるんです。それはもうしょうがないこ  
とがあるかと思えます。なので、保護者にとっては  
まだそこまで心がいていないという段階で、そこ  
を考慮しないで関わり過ぎてしまうと、土足で踏  
み入るような感じもあるかなとは思っています。

ただし、伝えておくことは大事だろうと、基本  
的には思っています。つまり、その場で行動につな  
がらなくても、保育園、幼稚園でこんなことを言  
われたという経験が大事なんです。そんなことを  
後から何らかのタイミングで発達相談に行くこと  
がありますよね。そのときに、「幼稚園、保育園  
ではどうでしたか」とこちらは聞きますね。その  
ときに、「あつ、そういういえばこんなことを言われま  
した」ということがとても大事だ  
と思えますよ。

なので、後々の支援の芽を残すという感じでしょう。自分との関係で、ぐっと支  
援がスタートしなくても、その種をまいておくことがとても大事かなと思えます。  
そのときには、「しばらく様子を見させてくださいね」という経過観察についての理解  
を得ておくということが大事かなと思えます。つまり、「こちらとしては気にかけている  
ので、ちゃんと様子を見させてくださいね」ということに関しては理解を得ておくとい  
うことです。その上で、機を待つことが必要な場合は、機を待ちましょうということになる  
だろうと思えます。

今日の私の話は以上であります。ありがとうございました。（拍手）  
こちらに文献もご紹介してあります。



## 文献

木曾 陽子(2016). 未診断の発達障害の傾向がある子どもの保育や保護者支援と保育士の心理的負担との関係—バーンアウト尺度を用いた質問紙調査より— 保育学研究, 54, 67-78.

文部科学省(2022). 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について

([https://www.mext.go.jp/content/20221208-mext-tokubetu01-000026255\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221208-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf))

2023年2月1日取得

佐藤 日菜・田口 敦子・山口 拓洋・大森 純子(2019). 保育士による発達上「気になる子」の保護者への支援の実態と関連要因の探索—発達上の課題の伝達に着目して— 日本公衆衛生雑誌, 66, 356-369.

85

## 文献

障害児通所支援の在り方に関する検討会(2021). 障害児通所支援の在り方に関する検討会報告書 (<https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/000845350.pdf>)

2023年1月17日取得

健やか親子推進本部 就学前の子どもたちの育ちを支援するために  
[発達障害をもつ子どもたちの支援 A4リーフ \(cfa.go.jp\)](https://www.cfa.go.jp/)

2023年12月20日取得

86

## 総合討論



【岡】これからの1時間は、今、お二人の先生にご講演いただいて、事前にご質問も頂いています。それで、それをお答えしていこうと思うんですけども、ただ、もしできれば、お二人のご講演を聞かれた会場の皆様から、何かご質問があれば最初にお受けできると思います。

恐らく関連したご質問も事前に頂いているものの中にあるかなと思うんですけども、もし、今この時点で、あの先生のこの部分はどうかというご質問等はございますか。よろしいですか。

毎年こういうふうにも、皆さんなかなか手を挙げていただけないので、途中でまた聞きますので、ご質問があれば、ぜひ考えておいてください。またお聞きするようにします。

それでは、頂いたご質問に幾つかのパターンがありました。1つは、頂いたご質問の中で言いますと、今日お話の中でもあったんですけども、保護者への伝え方、コミュニケーション、保護者支援といったご質問が、やはり多かったです。

例えば、不安の強い保護者の方に、どういうふうに対応したらいいのか。あるいは、保護者の方が子供の発達が心配で、精神的に参ってしまったような方の場合。それから、ともかくうまく相談につながらない。保護者自身にも困り感がある感じなんだけれども、対応に困っている。そういったことがご質問の中にありました。

既に佐々木先生には、そのことをいろいろご説明いただいておりますけれども、特に精神的にも追い込まれているような保護者を含めて、どういうふうに対応したらいいか。その辺り、何かアドバイスはございますでしょうか。

【佐々木】なかなか一般化したお話をするのが難しいことだなと思いますので、どのようにお話したらいいのかなどは思っていますけれども、まずはその方の抱えていらっしゃる不安や思いを丁寧に聞くことが第1ステップだろうというのは変わらないと思うんです。その人が何を思っているのか、何に不安を感じているのか、どの辺りに難しさを感じるのか、もしかしたら園に不満があるのか、そういうところをちゃんとお話を聞きながら、対応を検討するのが大事かなと思います。

その中で、園ではこんなふうに取り組んでいて、このように関わっていますよとい

うことを丁寧に伝えながら、関係をつくっていきながら、支援を進めていくというところで、ただ、例えば、鬱状態であるとか、もう本当に発達支援とは別に、保護者自身の支援が必要だという局面もあると思うんですけども、そのときに、その子供のことはさておき、まずはお母さんをサポートするという選択肢をとることもあるだろうと思います。やはり問題の見極めが第1ステップだろうとは思っています。本当に一般化したお話がなかなか難しいので、連想して、先生方から何かご質問等があるとうれしいなと思ったりしますけれども、どうでしょうかね。

【岡】すみません。私のほうで質問を1点抜かしてしまっただけ、保護者の方自身に発達障がいがあった場合というご質問もありましたけれども、その辺りはいかがですか。

【佐々木】基本的に、子供に発達上の課題がある場合と同じような発想というか、考えだとは思ってすよね。かなり分かりやすくお伝えすることが第一だし、そのお母さんにしてほしいことがありますよね。例えば、医療機関受診とか、療育に行くとか、子供との関わりをおうちでこういうふうにしてほしいとか、お母さんに対しての望ましい行動、こちらが思う行動があると思うんですけども、それを達成するにはどういうふうにするべきなのかというところを考えるかなと思うんですけどね。

そのときに、具体的に発達の課題があるお母さんであれば、その望ましい、してほしい行動を、かなりこちらからも分かりやすく共有するかなという気はするんですけど、このことをこういうふうにしましょうというか、そういう行動水準で共有するというか、つまり、お母さんが自分で考えて、どうすればいいんだろうと、お母さんの中で探るような余地がないように、こちらから分かりやすくお話をするかなと思います。お答えになっていますでしょうか。

【岡】どちらにしろ難しいですよ。

もし療育の立場から、広瀬先生のほうから今のご質問はありますか。

【広瀬】療育の立場というよりも、私、半分精神科をやっているんで、そういう視点で少しお話をしてみたいと思いますけれども、いわゆるストリングスモデル、強みに注目するというところはすごく大事で、不安というのは、逆に言えばちゃんと考えている。だけど、お母さんがすごく過剰なんですよね。

それから、抑鬱も一緒です。向き合おうとしているけれども、キャパシティオーバーになっている。しかも、もう一つの大事なキーワードは孤立という





ことだと思っんですね。独りぼっち。だけど、我々支援者からすれば、似たような境遇のお母さんというのはいっぱいいるわけで、あなただけが不安ではないし、あなたの立場だったら、お母さんの立場だったら、そう思うのも分かるよという共感。共感というのは、一緒に感じることでなくて、あなたの立場だったら、あなたのキャラだったら、あなたの子供の状態だったら、そういう考えになってしまうのは無理もないよねと、一緒になって分かってあげるといことが、僕はすごく大事。それで、分かってあげるといことが、分かってあげたつもりになる。こっちが分かっているんだよということが向こうに伝わるのがすごく大事かなと思います。

やはり1人で抱えてしまっていると病むので、そこは一緒に考えていく。場合によっては、お母さんも少しメンタルクリニックにかかって、今は昔よりは気軽にメンタルクリニックに行けるから、「寝ないともたないよ」とか、そういう話はぜひしていただければということが1つ。

それから、ご自身にも発達の課題がある場合は、むしろそれもストリングスモデルとして、お母さん、もしかしたらお子さんの理解が我々よりもっと深まるかもしれない。だから、お母さんもお子さんも不安になるかもしれないけれども、昨日来た人もそうでした。やはりそっくりなので、分かるんです。だから不安なんですという話をしていました。

「そうだね。お母さんじゃないと分からないんだよね」と言っていて、いろいろなことをストリングスモデル、不安や鬱、自身の発達の課題などは、逆に言えば強みにもなるんだと、僕はいつも接しています。

【岡】ありがとうございます。

よろしいでしょうか。  
そうしましたら、次は、なかなか難しいんですけども、保育士さんの数の問題と  
いうご質問が結構あって、これは誰かの力で増やすことができるのか、そういう問題  
ではないので、その中でのご質問としては、職員配置に難しさを感じる。どういった  
人的環境が必要か。今日のご説明の中にもありました。あるいは保育補助をつけて対  
応していますが、学級崩壊寸前ですというご意見や、一人一人に合った対応、寄り添  
うような対応が思うようにできず悩んでいますとか、発達が気になる子供の支援と、  
クラス保育を両立させる考え方はどうしたらいいでしょうかといった切実なお声を頂  
いています。

保育士さんを増やすという答えはちょっと別にして、何かアドバイスで結構なので、  
佐々木先生、何かございますか。かなり難しい問題で申し訳ありません。

【佐々木】もう難問だなと。さっきお話しするより、この場が一番難しいと思っ



いるんですけれども、今日、私がお話ししたような環境構成の部分ですよね。そこは、基本的にやっていただけるといのかなどは思っんですね。ただ、それさえも、日頃の保育の中で考えたり、それを準備する時間も、本当はなかなか難しいと思っんですね。

だけれども、環境構成は、できることの大きな1つだろうとは思っています。それをした上で、私も、つい最近、これ以上何をしたいか分からないと悩んでいらっしゃる先生とお話をしたんですけれども、やはりすごく熱心な先生がそうなる部分もあって、もう本当に何事もなくスムーズに回っている姿を思い描いてしまうと、多分難しくなってしまうって、先生方は一生懸命だから、自分たちの関わりが足りないのではないかといい思いをすごく持たれるんですよね。自分たちが何か関わりが不十分だし、勉強が足りないから、クラスがこういう状況なのではないかとすごく思いやすいなという感じを思っ

んですよね。  
なので、そんなことはなくて、正直、すごく頑張っ

ていらっしゃいますよというところは、私からす

ごくお伝えしたい部分で、すごく矛盾するんですけども、私、幼稚園に関わらせていただいているんですが、正直、先生方を前にしてしま

うと、それ以上の要求は言えないんですよ。私が私なりに把握している、子供が過ごしやすい工夫やコツというのは、理論上はあるんですけども、先生方を前にすると、それ以上言えなくなってしまうんですよね。今やっている保育で精いっぱいなのは分かるので、プラスアルファを加えられないという感じがあるというのが私の正直な実感で矛盾があります。  
なので、正直、この場に私が関わっていらっしゃる先生方がいたら、「じゃ、それを言っ

はつながつているから、その子のあれこれを考えないで、この部分の、この行動をできるようにしてあげたいなということは何かありますかと話をしてきました。

そうしたら、「じゃあ、あのことかな」と言っていて、「ああ、では、もうそれで行きましよう」と言っていて、しばらくはそこに集中しましょう。今月は、そのことができる月間でもいいですよという話をして、自分の方向性というか、こんなふうに行っているのか、少し方向性が見えると、先生の気持ちも落ち着く部分もあって、では、そこに注意、力を入れてやっています。では、先生、もうそこに決めたのであれば、徹底してそこをやる必要があって、その子が先生が思う望ましい行動をしてくれたら、ちゃんと応答していきましょうね。それで、その子はいつもいつもそうではないわけで、ちゃんとできている場面もあるはずだから、そういうときは、今日、私がお話ししたような、すかさず、こちらから前もってどんどん伝えていく。「すごいね。今日は頑張っているね」と言っていていきましょうとお話をして、そんなことを言いますかね。

なので、あれこれしようと思わないで、つまり、子供の支援と同じというか、先生方も、今、私は何に力を注ぐのがいいのかと、少しターゲットを絞ったほうがいいのかなという気がします。

だから、今月は少し絵カードを作ってみようとか、それぐらいでもいいかもしれないですよ。今月は絵カードを作ろう。では、来月はお母さんとどんなふうにお話してきそうか頑張ってみようとか、そんなことでもいいかもしれないし、1個1個分解してやっていくのが大事かなと。

先生方は、私から見ると頑張り屋さんが多い気がするので、時間もない中でパンクしているなという感じがするので、そんなことを私からはお伝えできるかなと思います。

【岡】ありがとうございます。

何となく先生のお話を聞いていると、少しずつ安心してくるような感じがいたしたけれども、この点に関してはよろしいですかね。

本当に手が足りないというのは、社会も重々承知しているのですが、社会のほうも、これから保育士さんを増やそうという方向で動いておりますけれども、まだまだ皆さんが大変だと承知しております。

それでは、次の質問に移らせていただきます。

少し具体的なお話になりますが、加配のついておられるお子さんがもうすぐ就学されるということで、心配だということのようです。

ただ、親ごさんは、発達支援センター等の利用もあまり考えておられないという状

況で、どうしたらいいのか。あるいは、もう一つのご質問は、先ほど、お二人のご講演にもありましたけれども、就学前の療育機関の通所の必要性はどういったものかということ、先ほど、佐々木先生からは、園のほうでどういうふうにご話をしたらいいかということは、かなり具体的にご説明いただきましたけれども、広瀬先生の療育施設の立場として、就学前にどういうふうにご説明いただき必要があるのか。あるいは、今、加配がついているお子さんをどういうふうにつなげていったらいいのか。親ごさんもあまり療育には前向きでないといった場合、何かアドバイスはございますでしょうか。

【広瀬】さっきの自分の講演の中でも少しだけお話ししましたけれども、小学校というのは、子供たちにとって、かなり壁なんですよ。そこで、1年生から不登校の子が増えているという現実があって、幼稚園、保育園さんで手厚く丁寧に、個別に関わってくださればくださるほど、そういうニーズが分かっている小学校に入れば、小学校でもそれなりの、でも、僕は園ほどではないと思いますけれども、それなりの支援はあるけれども、一気に何も支援がない通常級に入ってしまうと、大抵大変ですよ。子供が大変ですよ。

だから、小学校でこの子たちが上手に学び、友達関係をつくり、生活し、学校は楽しいなと思ってもらえるための手だてを一緒に考えたいな。レッテル貼りではなくて、学びの場として、小学校がちゃんと環境設定できるように、だから、就学相談というのは、レッテルを貼って、差別して、あっちへ行けとやるのではなくて、子供たちが小学校の中で、その子にとって一番ベストな発達をするには、どんな環境がいいかというのをつくる、考える場なんだよ。そのためには、そういう状況だけだと少ししんどい場合はどういうふうになるわけ。

それでも嫌がる親ごさんは嫌がりますけれども、その場合はじっくり時間をかけて、見立てをして、またお話をしていくしかないかなというところ、療育センターの場合は、受け手の側としては、つながってこられた方というのは、ある程度勇気を出していってらっしゃっているんですね。迷って、どうしようかな、あんなところ行きたくないなと思いつついても、やはり子供のために、えいやっと思つて決心して来ていたのだと思います。親ごさんの決心や勇気というのは、我々もあまり言葉に出しませんけれども、よく来てくださいましたね。一緒に考えていきましょうというスタンス。

それでも、「こんなところ来たくなかった」とおっしゃる方はいますけれども、だよねという話で、でも、この子のために何がいいか一緒に考えていきましょうと、大抵そんなスタンスでやっています。

【岡】ありがとうございます。

よろしいでしょうか。

そうしましたら、次、少し具体的な行動のご質問があるので、行動についてもご説明は頂いておきますけれども、行動が気になるお子さんの中で、他児に手が出ることも多いお子さんが複数いらっしゃるということで、中には登園を嫌がるようなお子さん、手が出るお子さんがいるので「怖い」と言って、そういう子も出てきている。保護者からは、園のほうにしっかりと対応してほしいという要望もあつたりして、非常に対応が難しいということで、アドバイスをといることですね。

これは、会場にいらつしやるみたいで、もしよろしければ具体的に、もう少し質問していただいてもいいですけども、この頂いたご質問だけでよろしいですか。よろしいですか。

あと、少し似たようなお子さんと、急に怒り出したり、周囲のお友達とトラブルが絶えないようなお子さん。指しゃぶりをしながら、髪の毛をむしったり、いろいろ自己刺激をしているお子さんの保護者の方も、激しく叱ったり、感情の起伏が大きくて、対応が難しいということで、そういったお子さんへの対応はどうしたらいいですかというところで、これは佐々木先生にお願いしようかなと思えますけれども、個別で、特に最初の方を中心にしてアドバイスいただくのもよろしいかなと思えますけれども、お願いします。

**【佐々木】**これは会場にいらつしやるようですので、ゆっくりお話したいなという気持ちになりましたけれども、なかなか頂いている情報が決して全貌が分かるわけではないので、私も妥当なお返事はできないかなという気はしているんですけども、1つは、この頂いた文章の中で私がお聞きしてみたいなと思ったのが、手も速くて、突然そのような行動になるので、止められないときもあるということだったんです。

それは、先生方のご実感としては、分かる分かつきとあるのかなと思うんですけども、私の立場から考えてみたいこととしては、本当に突然なんだろうかとこのところは、考えてみたいのかなという気はします。つまり、すごく薄目で見るとどうか、すごく遠巻きに見ると、突然に見えてしまうんだと思うんですけども、多分突然ではないのではないかなという気もするんです。多分、これは多くのケースで、それはそうなんですよね。

なので、いや、そんなことを言うけれども、それは理想的なお話とおつしやるかもしれないけれども、多くのケースで、やはり突然ではないんですよね。

なので、突然に見えるその行動を、何が起こっているのか。先生もその場に身を置くような感じで、子供たちの心の流れを追いながらじっくり考えたときに、あつ、こ

れが原因かもしれないとか、これがこの子の気持ちに何か触れたんだとか、少しきつかけが見えてくるのではないのかなと思うんです。

なので、今、頂いたご質問の中でお返事をするとしたら、突然に見えるところを突然ではなく見えてくると、多分、関わりが見えてくるのではないのかなと思えました。少し難しい宿題をお返ししているかもしれないんだけど、そんなところを本場にじっくり見てみてあげて、もし何か見えてきたら、見えてきたと、何かどこかのタイミングでお返事が欲しいぐらい、お伝えしたいなと思えました。

もしこの会場にいらつしやるって、何かお話などがあればと思いましたが、全然大丈夫です。

**【岡】**ありがとうございます。

特に複数いらつしやる、本場に対応は難しいと思えますけれども、その状況をまた検討いただければと思いました。

それから、また個別のもので、1例ずつ行ったほうがいいのかもしれないので、これは広瀬先生にお願いしようかと思えますけれども、4歳児で他児とトラブルになって、手を出しそうなときに間に入って制した保育士さんに対しても、泣いて大きな声を出したり、たたいたりするということで、それ以外でも、保育士さんをたたいたりすることがあるということで、物を投げたり、棚を倒そうとしたりするような行動も前にあつたということで、そういう行動に対して、どうしていったらいいか、困っているということですけども、何か先生からアドバイスはございますか。

**【広瀬】**よくある話だと思いますけれども、これもケース・バイ・ケースですので、さつき佐々木先生がおつしやるように、行動の分析というか、どういう背景で、その子がいゆる問題行動をやっているのかということや、少し考えたいかなと思うんです。他害と呼ばれる行動が衝動的に、もう本場に瞬間湯沸器的にバツとなつてしまう場合と、それから、もう少し成長、発達すると、何かその子なりの意図があつて、メッセージがあつて、僕の経験だと、多くの場合は関わってほしい。その関わってほしいというメッセージの出し方が下手つびなので、こちらが少し積極的に関わってあげたり、もう一つは、どうしても他害をするお子さんというのは、自分がたたかれていますという可能性を、僕は頭の片隅には必ず置いていますので、外来で、わざと冗談半分に、親ごさんに「おうちでたいたりしていませんか？」と。それでぎくつとした顔をしたら、「ごめん。変なことを聞いてちゃつた」みたいな、そこをお母さんに振り返ってもらうということはたまにやっています。

もちろん本場に虐待だったら、また別のやり方をしなければいけないですけども、そういう下手つびな関わり方だから、こちらが少し積極的に関わってあげるとい

が1つ。

それから、もう一つは、もう少し発達すると、子供というのは相手を見てやるんですよね。相手を見て、にやつとしてからたたくみたいな、それに気づいたら、「あつ、今、やろうとしているでしょう。ばれているんだよ」みたいな、こちらが一瞬先の先手を行くみたいなこと。

それから、もう一つ、いつも僕が先生たちにお話ししているのは、何か最近調子いいよねというときに、何がいいのか。子供が発達したのか、クラスの環境がよくなったのか、親の関わりがよくなったのか、あるいは、もしかしたら薬を飲んでいいのか。うまくいっているときにこそ、あれ、この子は何でうまくいっているんだろうという分析をぜひしていただくと、駄目なときは分析するんですよ。何でこうなってしまったんだろうと必ず分析するんですけれども、うまくいっていると、ああ、よかったですね。わかってしまう。だけど、うまくいっている要因分析は、すごく建設的なんですよね。その子にもすぐ役に立つし、別のケースにも役に立つ。だから、うまくいったときにちゃんと振り返ると、実は、他人がすごく上手になったのかもしれないな。

あと、最後にもう一つは、子供が手をあげようとして、こちらがならんだら、ちょっと我慢した。一瞬我慢できたときに、「我慢できたじゃん。偉いじゃん」と言っていて、子供だつて我慢する力はないんですよ。だから、子供が寸前に踏みとどまった場合は、「偉いね。今日は我慢できたね」と言つて、「オーケー」と言つてあげるのでもいいかなと、聞いていて少し思いました。

以上です。  
【画】ありがとうございます。

そうしましたら、よろしいですかね。  
次の質問で、保護者の間のトラブルということで、佐々木先生、難しい質問ばかりですみません。

ご質問の全般は、発達に課題のあるお子さんということで、なかなか受け入れが難しく、対応が難しい保護者の方で、保護者間のトラブルも寸前といった状況だということで、保育の工夫もしていくけれども、両方の保護者に対して、どういう対応をすればいいか。何かご助言があればということなんですけれども、特に発達に課題のあるお子さんの行動に関しては、ほかの保護者の方からもよく言われているというのは私も外来でよく伺いますが、何かアドバイスはございますか。

【佐々木】これも本場にじっくりお話ししたいなという感じがあつて、じっくりお話をしながら、どうしたものかねと考えたい感じはあるんですけども、ここで発達の課題があるお子さんであることは、恐らく間違いないで、受け入れが難しいとい

うことは、集団生活の中で、その子がクラスの中にいることで何か難しい状況が起こるのかなというところは推測されるんですけども、どうなんでしょうね。

私が思ったのは、このことに対する園側の方針というんでしょうか、園側の思いとどうか、多分、これをお聞きする感じで、発達がゆっくりなお子さんなんですよね。そのゆっくりなお子さんを同年齢のクラスの中に入れて過ごしているわけけれども、その子の生活を支えていくことにに関して、園としての思いとどうか、信念とどうか、そういうものが少し定まつて、こちらの軸がしっかりないと、ちょっと向き合えない事案だなという感じがしたんですよ。

この子がここにいて、いろいろあるかもしれないけれども、私たちも精いっぱいやっていくし、できればお力をかしてほしいとか、何か協力してほしいとか、いや、私たちはこの子も含めて、このクラスとしてやっていくんですよ、園側の信念がぶれずにあつて、そのことがあるから、ちゃんと保護者と向き合えるという感じなのか、なという気もするので、このことをめぐつて、まず園の中でどうしているかと思つているのか。園も、いや、困つたなと思つている。実は、その受け入れ難しい保護者と同じ化できる思いがあるというのかな。

だから、いろいろ言つてくれる保護者に対して、何となく無意識のうちには分かるというか、もつと言つてもらつていいんだよという感じがあるのか。人の心には無意識がありますので、そんな感じがあるのか。いやいや、何があつたつて、この子はこのクラスで私たちが受け入れていくんですという思いがちゃんとあつて、それに即して対応するんだという思いがあるのか。大げさに言うとか、園側の信念とか、理念のところに関わつてくるお話かなという感じがしました。

【画】ありがとうございます。  
その突破口として、そういった軸を持つことで、少し開けないかというアドバイスかなと思います。ありがとうございます。

確かに私も外来とかで、親ごさんたちは我々医療者に対しても非常に警戒心が強く、なかなか受け入れられないという思いで来られているわけで、そこを園でもほぐすのは非常に苦労されているんだと思います。受け入れているんだということをどこまで伝えられるかというのは、本当に大事な点かなと思つていました。ありがとうございます。

今度は、医療者にとっては頭の痛いご質問で、発達の気になるお子さんは区役所の発達相談に行ってもらい、その結果、療育センターにつながるケースもあります。発達相談で「大丈夫」と言われてしまうことが多々あり、困惑することがあります。保育所から積極的に子育て相談に連絡を入れたほうが良いのでしょうか。要するに、

健診に行っても、ちつともアドバイスしてくれないではないかと。

先ほど、佐々木先生のお話の中で少しありましたけれども、これは療育の医師の立場で、広瀬先生にコメントを頂こうかと思えます。

【広瀬】ありがとうございます。

本当に「大丈夫」と言ったのかを我々などが聞くと、「そんなこと言っていないよ」。逆もあって、健診で紹介されて、幼稚園の先生に「療育センターに行ったほうがいいか」と聞いたたら「大丈夫です」と。聞いてみたら、「そんなこと言っていないよ」と。なので、情報は裏を取る必要があります。やはり僕たちもそうですけれども、自分にとつて都合の悪い情報は、消えてしまいか、下手したら変更してしまうんですよ。そのために、我々他機関が子供たちに関わるわけなので、「大丈夫です」と言われて、「何でこの子は大丈夫と思う」と聞いたたら、「学校も困っているんですけど」と。「だよ」と言うことがあります。それが一つ。

だけど、実際に「大丈夫」と言われたことがあるんですよ。その「大丈夫」というのは、またこれも曖昧な言葉で、「様子を見ましょう」とか、「大丈夫」という言葉を、「発達に課題がない」という意味では使っていない場合があるんですよ。発達に課題はあるけれども、さつき佐々木先生も言われたように、毎日幼稚園にちゃんと行っているから大丈夫でしょう。でも、「発達が大丈夫」とは言っていないので、やはりその辺の言葉の使い方は難しいなと思います。

だけど、最終的には、先生たちが気になったら、「えっ、そんなこと言われたの。でも、私たちが毎日見ていると、何かサポートがあったほうがうまくいきそうなのから」と。逆に我々の受け手の立場としては、「何で来たの」と言いませんから。大抵おつかなびつくり来た人というのは、我々が関わったほうがいいことがある。最近でこそ、あまりに情報が広がってしまっていて、心配のあまり、さすがにお母さん、大丈夫だよという子も療育センターに来るんですよ。だけど、そういう人はめったにいないし、そういう人には「大丈夫」と言っても、「ですよ」と言っただけで終わってしまうので、いろいろなところで「大丈夫」と言われても、先生たちが心配だったら、「いや、だけど、私たちは心配だから、頼むから行ってきて」という形でつないでいただければ、もう正直が一番いいと思います。それでいいと思います。

【岡】ありがとうございます。

あと、先ほど、佐々木先生のお話の中で、A4、1枚ぐらいで、園での生活の様子をまとめたものを書いていただくというものがあつたと思うんです。もう診断を受けている子供ですけれども、私も外来では、よくそういった園での様子を書いていただいて、その行間を読むといえますか、どこで園の対応が困っているのか、あつ、きつ

とここで大変なんだと、行間を読んだりするんですけども、そういったことというのは、佐々木先生、今度、そういう相談に行かれるんだつたら、これを持っていったらみたいなのは、園からはできるんでしょうか。

そういうことは、どうですか。健診をする先生が、ちょっとした園での様子、これは園でかなり課題が指摘されているんだということが分かるような書類、お手紙を渡すということはされているんでしょうか。

【佐々木】はい。私が関わっている園で、実際にしているようなことですね。やはり先生方の目線は、生活を細やかに見ていますので、その姿がちゃんと押さえられていて、それに対して、私が心理の目線から、少し特性のことも踏まえたことを書いて、これこれ、こういう理由から療育が望ましいであろうということを、一筆書いてりするんですよ。

そうすると、グレーゾーンの子で、受給者証が難しいかもしれないということがあつて、そのときにバックアップすると、結構すつと通ったりすることもあつて、お母さんが言葉で言えない、お母さんもなかなか表現できない部分で、園からできる結構大きなバックアップかなとは感じます。

【広瀬】いいですか。あと、岡先生のように、行間を読めるドクターばかりでは決まらないので、多分、先生たちもいろいろとご苦労されていると思います。ドクターに限らず、ある専門機関に文書を送るときに、どういう伝え方をすると動いてくれるかというのを、専門機関や専門職のアセスメントをせひしていただいて、上手に使っていたことが大事で、本当にストレートに書かないと伝わらないところははいっぱいあります。様子がずらずらと書いてあるだけで、「そうね。それで、何か？」みたいな、それで終わってしまうと、せつかく書いたのに終わってしまうので、せひ受け手の我々療育機関のアセスメントをして、上手に使っていただければと思います。

【岡】それは、こちらの医療側の問題なので、本当に申し訳ないです。要するに、お母さんの目に触れる文書として園が渡されている文書なので、そこに悪いことは書けないということは重々承知して、だからそこで我々は行間を読むわけです。それで、大体分かるということですが、それは医療者のスキルの問題で、要するに我々の宿題ということになります。申し訳ないです。

次は、非常に具体的な質問で、これは佐々木先生に教えていただきたいんですけども、「駄目」の伝え方で、いろいろな保育士、職員の間で差がある。「そうだね。こうしなかったね」と一旦受け止め、落ち着いたから駄目なことを伝えるのと、簡潔に駄目と伝えるのと、いろいろな方法があると思うんですけども、その伝え方というのは、何か統一したほうがいいのか、その辺りはいかがですか。

【佐々木】これを問題と思われた。それはどういう問題が起こっているのかなと、少し関心を持ったんです。

結論から言うと、私はどちらでもいいのではないのかなと、正直、思っているんです。受けとめてから、落ち着いて言ってもいいし、簡潔に「駄目」と言ってもいいだろうし、その子供にとつての分かりやすさも大事だし、その子が分かれれば、伝われば、そして、その子が納得できるように伝えられればということがあると思うんです。なので、表現としては、どちらでもいいかなと思いました。

ただ、子供の中で、表現が違うことで混乱が起きるのであれば、その子供に対しては統一したほうがいい場合もあるかもしれないです。その子に関しては、こう言ったほうが伝わるんだという状況があるかもしれないので、その場合には統一感は大事故かもしれないけれども、駄目なことを伝えるにあたって、今の2パターンのどちらがよりよくてということはないような気がしました。

だけれども、私が今日お話ししたように、意外と伝えるときの声の感じがとても大事なんです。「駄目」と言うときに、物すごく怖い場合不是吗。物すごく怒気を含んだ声で、強い感じで「駄目」と言うときがあるんですね。私などは、あつ、怖いと思うときが、正直、あるんです。ああいうふうに言われてしまうと、「駄目」と言われた内容よりも、怖さのほうが残ってしまうという感じがするんですね。なので、「駄目だよ」と言っても全然いいと思うんだけど、本当にちゃんとその子の心に届くように伝えることが大事かなと思いました。

以上です。

【岡】ありがとうございます。

そのどちらかということではないということで、ただ、逆に言うと、今おっしゃったように、例えば、子供が怖がるような言い方をすることで誤ったメッセージ、要するに怖いことだけを覚えてしまって、何を叱られたのか分からないという状況だけは避けたいいけない。だから、やってはいけないことのほうがあるということではないかなと思います。

皆さんはプロですので、きつとすごく優しいんだと思いますけれども、やはり大人だって頭に来ることはあるわけで、特に何かこぼれてしまったというと、その場では大人も心はパニックになっていますので、そういうときに、子供たちに伝えるメッセージとして「駄目なんだよ」ということをいかにクールに伝えられるかということ。そこは、本当に皆さんプロなので、ぜひ上手にやっていただけかなと思います。

そうしましたら、続いては、また難しいもの。これは、一応、触れておかないといけないですね。これは広瀬先生に、医療的ケア児のお子さんのご質問で、医療的ケア

児のお子さんが、最近、保育園でお世話になっている方が増えてきていると思います。ありがとうございます。

ただ、そういうお子さんの中には、発達障がいの課題を持っているお子さんもいて、このご相談のところでは、医療的デバイス除去等の事故リスクが高くなるのではないかと心配されているということですね。実際はどうなのでしょう。

【広瀬】療育センターですと、肢体不自由の通園はずっと昔からあって、医療的ケア、気管切開等も含めたお子さんたちの保育をずっとしているわけです。統計的に取ったわけではないですけども、やはりいろいろ事故はあります。そんなにしょっちゅうあるわけではないけれども、時々起こり得ることで、頻度が少ないとはいえず、命に直結するような除去などが起こり得ますので、そういうシミュレーションというか、モニターをしておく必要があると思います。

しかも、医療的ケアのある子で発達障がい、特に過敏があると、ちょっとしたことでも抜いてしまったりということがあります。それから、同じクラスのほかの発達系の子が抜いてしまったりとか、それから、昔、補聴器を分解してボタンを飲んでしまったり、内視鏡になったということがあります。これはもうえらい騒ぎになりました。こちらが謝るしかないんですけれども、やはり今のご時世ですと、我々も含めて管理責任が問われてしまいますし、それ以上に子供たちの命や健康にも影響しますので、医療的ケア児はやるが多くて大変申し訳ないんですが、せっかく保育の現場に入ってこられるようになって、子供たちは健常児との触れ合いで本当に生き生きとしていると思うんですね。

ですので、ちょっとまた仕事が増えてしまっただけですが、やはり気をつけながら保育に参加していただきたいなと思っています。

以上です。

【岡】ありがとうございます。

本当に難しい問題で、決してその保育園等に無理難題をお願いするということではないんですけども、ただ、子供たちにとって非常にプラスの面があります。社会として、安全性も担保しながら進めていくという、本当に難しい作業だと思いますけれども、その子たちの一生にとつては非常に大きなことなので、今、広瀬先生も言われたように、できる範囲内で進めていただくとどうですか、今の段階ではお答えが難しいかなと思います。

時間の関係もありますので、そろそろ終わりにしたいと思いますけれども、今日、お二人の先生からご講演いただいて、皆さんの日々の中で、気になる子供たちの対応に少しでも前向きになれば、本当にこのシンポジウム、セミナーとしては非常にあ

りがたいことかなと思っています。

発達障がいといったことについては、社会の関心も非常に高くて、本当にいろいろなご意見があります。例えば、インターネットや本などでも、本当にエビデンスのない様々な情報が流れていて、今日、そういうことは取り上げていませんけれども、そういう極端な意見というのは一般的なものではないと考えていただいて結構です。

今日は、対応というところでは、私自身は、お二人の先生がお話しされたような考え方というの、非常に一般性のある対応の仕方をお話しいただいたと思っています。です。極端に走らないということも、1つ大事なのかなと思います。

最後に、もしよろしければ、お二人の先生に一言ずつ、保育の関係の皆様にかかメツセーじを頂けるとありがたいと思います。

広瀬先生からよろしいですか。

【広瀬】ありがとうございます。遅くまでお付き合いいただきまして、ありがとうございます。

情報がすごく多いのでくたびれたのかなと思いますけれども、やるのがどんどん増えていくんですね。今の医療的ケアもそうですし、発達もそうですし、今日、あまり触れられませんでしたけれども、愛着の問題、トラウマの問題。それは、昔もあったことですが、昔は何となく見過ごされていた、あるいはわがままと勘違いされていた。だけど、今はこういう情報化社会ですので、いろいろな子供にまつわる情報がどんどん増えていく。なのに、現場のスタッフは増えない。下手したら減るみたいなの、そういうジレンマで、本当に大変かなと思います。

横須賀の場合も、人口は半分ぐらい、この15年で出生数が6割ぐらいに減っているんですけども、相談に来る数は2倍になっていますので、実際に対応するのは4倍ということなんです。多分、先生方もそういうご苦労をされていると思いますので、さつき佐々木先生がおっしゃったように、できることをやっていく。

昔の理想の保育や教育、我々の療育もそうですけれども、療育センターなどで言うと、狭く深くはもう無理です。広く浅く、とにかく来た人に必要なサービスを少しずつ、我々ももう少しいろいろやってあげたいないつも思いながらサービスをしているんですけども、なかなか難しいので、できる範囲で、できることをやって、みんなで愚痴を言って、うちはスタッフルームで、ここではとてもお話しできないような愚痴をみんなで言っていて、我々が潰れないことが子供たちのためには一番大事だと思うので、さつきも言いましたけれども、帰りにおいしいお菓子でも買って、ぜひ自分へのメンテナンスをしていただければと思います。

【廣】ありがとうございます。

佐々木先生。

【佐々木】今日は、このような貴重な機会を頂きまして、ありがとうございます。

私は心理士として、保育現場にとっても関わりを深く持たせてもらっていて、いろいろな園の先生方にお世話になってきているという実感があるんです。今は、幼稚園でスクールカウンセラーとして、いろいろな子供たちの育ちを見たり、いろいろなお母さん、お父さんとお話をしたり、先生方とお話をしたりということを見せていただいている、今日お話ししたことは、本当に私が日頃考えていること、私が現時点でお伝えしたいなと思うことをまとめたお話をしたという感じなので、私自身も自分の考えの整理になったりしましたし、とても貴重な機会を頂いたなと思っています。

やはり専門職は、こんなふうになら成長していく部分が大いかなと思います。5年後には、私も違う話をしているかもしれないですが、またバージョンアップして何かお伝えできればいいなと思います。今日はありがとうございました。

【廣】ありがとうございます。

何か会場から、ご質問でなくても何かコメントなどでも結構ですが、何かご発言はありますか。

よろしいですか。

本当に気になるお子さん、それから、既に診断を受けているお子さん、園では大勢のお世話になっているかと思っています。ですが、そこで過ごしている生活が、その子たちの就学後につながりますので、決してそこを園の皆様だけに押しつけるということではなくて、社会全体で応援していきたいというのが、今の新しい国の方針ということで、その1つのきっかけが、今、国として考えているのは5歳児健診で、支援につなげられないかということなんです。社会全体がそういう機運になっていきますので、ぜひ保育からも声を上げていただいて、こういうことでは困るじゃないかみたいなことを、地域の中でどんどん共有していただくということが、これからとても大事だと思います。

ぜひ、あしたからの保育に役立てていただければ幸いです。

—— 了 ——





【講師ご紹介】

岡 明 (おか あきら) (座長)

略歴

昭和59年 東京大学医学部附属病院小児科入局  
 平成2年 米国Harvard大学Boston小児病院神経科研究員  
 平成10年 鳥取大学医学部脳神経小児科助教授  
 平成16年 国立成育医療センター神経内科医長  
 平成19年 東京大学医学部小児科准教授  
 平成21年 杏林大学医学部小児科教授  
 平成25年 東京大学大学院医学系研究科小児科教授  
 令和2年 埼玉県立小児医療センター病院長  
 現在に至る。

役職・学会等

日本小児科学会 会長  
 日本小児神経学会 監事  
 日本保育保健協議会 副会長  
 日本小児保健協会 理事

専門分野

小児科学、小児神経学

広瀬 宏之 (ひろせ ひろゆき)

略歴

昭和44年 東京都生まれ  
 平成7年 東京大学医学部医学科卒業  
 平成7年 東京大学医学部附属病院小児科  
 平成8年 千葉徳洲会病院小児科  
 平成11年 東京大学大学院医学系研究科  
 平成15年 国立成育医療センター1こころの診療部  
 平成18年 フライデルファイア小児病院児童精神科  
 平成20年 横須賀市療育相談センター1所長

役職・学会等

日本小児科学会専門医  
 日本小児神経学会専門医  
 日本小児精神神経学会認定医  
 子どものこころ専門医・指導医  
 専門分野  
 発達障害、小児精神、小児神経学

佐々木 美恵 (ささき みえ)

略歴

筑波大学第二学群人間学類卒業  
 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程修了  
 博士(生涯発達科学)  
 精神科クリニック・総合病院精神科・心理職、  
 中学校スクールカウンセラー、福島学院大学福祉学部・専任講師、  
 埼玉学園大学人間学部・准教授等  
 現在 埼玉学園大学人間学部・教授  
 役職・学会等  
 健やか親子21(第2次)幹事会委員(令和2～3年)  
 専門分野  
 臨床心理学・発達臨床心理学